大同・雲崗石窟
仏教聖地五台山
浄土宗の祖庭
・玄中寺
霊　峰　泰　山
孔子の里・曲阜
紀行

昭和６３年５月２７日～６月７日

寺　前　信　次

「雲崗石窟・五台山・玄中寺・霊峰泰山・岱廟・孔子の里を訪ねて」目次

まえがき ・・・ 1
5月27日 ・・・ 2
5月28日 ・・・ 2
暮田峪長城 ・・・ 2
長城の歴史的由来 ・・・ 2
景山に登り北京の回顧 ・・・ 4
塗炭の苦しみ ・・・ 5
夜・北京を発つ ・・・ 5
5月29日 ・・・ 5
大同 ・・・ 5
華厳寺 ・・・ 6
九龍壁 ・・・ 7
善化寺 ・・・ 7
雲崗石窟 ・・・ 8
5月30日 ・・・11
大同～五台山 ・・・11
懸空寺 ・・・12
恒山 ・・・13
五台山へ ・・・13
5月31日 ・・・15
五台仏教の歴史 ・・・15
塔院寺 ・・・17
顕通寺 ・・・17
菩薩頂 ・・・18
普化寺 ・・・19
南山寺 ・・・22
佑国寺 ・・・22
6月1日 ・・・23
五台山～太原 ・・・23
金閣寺 ・・・23
仏光寺 ・・・23
太原へ ・・・24
山西省の概要 ・・・25
太原の概要 ・・・25
中国の州・県について ・・・26
城壁の由来 ・・・26
6月2日 ・・・27
浄土宗の源流・玄中寺の由来 ・・・27
曇鸞大師 ・・・27
道綽禅師 ・・・28
善導大師 ・・・29
親鸞聖人 ・・・29
石壁山・玄中寺詣で ・・・30
晋祠 ・・・32
崇善寺 ・・・33
山西省博物館 ・・・33
6月3日 ・・・34
双塔寺 ・・・34
太原～石家荘の回顧 ・・・34
娘子関 ・・・34
井陘 ・・・35
敗軍の将・兵を語らず ・・・36
石家荘 ・・・36
済南 ・・・37
山東省の概要 ・・・38
6月4日 ・・・38
泰安 ・・・38
霊峰泰山 ・・・39
泰山登山 ・・・40
岱廟 ・・・42
封禅 ・・・44
6月5日 ・・・45
曲阜 ・・・45
孔府 ・・・46
孔林 ・・・47
孔廟 ・・・50
兗州 ・・・52
6月6日 ・・・53
上海 ・・・53
6月7日 ・・・53
あとがき

まえがき

「広博瞻望」広く世界を観て知識を博くする楽しみは、大釜の中の沸き立つている湯のように熱く、しかも決して冷めないものだ。今さら博学になつても無価値に等しいようなものだが、荘子の云った「無用の用」になるかも知れないと旅立つた。鬼籍に籍を移すまで続くだろうと、呆れ返つている。

「騎獣の勢い必ず下るを得ず、之を勉めよ」速い馬に乗ったようなもので、下手に下りると怪我をするから、とことんまで続けよという名文句がこれだ。自己満足であることは勿論である。

老いと病が同時に攻めて来た昨今では、旅の快楽は若木のような感受性は少ない。然し乍ら余りにも高度に発展した科学文明の陰に、周囲の環境は人間性を失い始めている。そこで歴史のある古代に接触して、少々でも人間性を取り戻したいと、今回も歴史の国に憧れて、渡天の旅路に駆り出した。

今次の旅は華北の山西・山東両省の史跡の地を選んだ。昭和初期に流行した「俺も行くから君も行け、狭い日本に住み飽いた。海の彼方に支那がある、支那に四億の民が待つ」という馬賊行の歌ではないが、戦袍に身を包んで青雲の志をいだき、中国大陸に足跡を印してから半世紀を経過した。敵弾下に身を曝し、露を凌ぎ靴を枕に夢を描きながら、人生意気に感じて戦った彼の地は誠に懐かしい。

算を乱して潰走する敵を息もつかずに急追した山西・河南の大会戦、今では彼我の幽魂となつた霊を弔うものは、山野に鳴く虫の声だけかもしれない。今回は想い出の多い山西省の地を訪れて雲崗石窟・五台山を巡礼し、浄土宗の祖庭（庭とは場所の意味）までも参拝できたことは、誠に幸いなことであつた。

中国古代から会戦の続いた徐州から津浦線に乗り換えて、幾度か孔子の里・曲阜を通過し、五嶽随一の泰山を登る石段を眺めながら、生あるうちに登ってみたいと念願した夢が、漸く現実となつたのである。

歴史の著者である各史跡は歴史を語りかけるようで、修学旅行のような感じを与えた。我々年代の人達は、「義は泰山より重く、死は鴻毛より軽し」と教えられた。後者の思想は今日では無に等しいが、凡て我が生命を如何に用いるかが問題である。

自然界も人間界も不断に変化しており、我々は此の変化の過程を理解し、其の変化の中に在ることを認識しなければならない。生を愛し死を憎むことは人間の真情だ。然しより高い道理によつて動かされる場合は、人間はそうでなくなる。それは、やらなければならない事があるからで、我々の春秋に富んだ時代の思想であつた。

泰山が砥石のように小さくなり、黄河のように細くなつても、雲崗・五台山や孔子廟などの遺跡は、何時の世までも人間の教師である。我々は時代の変化の中に之らを生かして行きたいものである。

九回目となつた今次の訪中の旅ほど充実した旅は稀であつたが、一を知つて二を知らない狭い見識の私などには、これを表現する才能は全くない。然し乍ら数々の歴史や印象を綴ることに意義がある考え、痩せ馬に鞭打つてワープロを叩いた。よしの髄から天井を覗いたようなものに過ぎない。

5月27日（金）晴

北京へ

ＣＡ９２２便の鵬翼は１５・３５に大阪空港を離陸した。中国人の俳優かモデルであろうか、中国服を着た背の高い美人達が、昔懐かしい中国情緒を漂わせていた。

１８・３０頃、搭乗機は大陸上空に指しかかると、秦皇島西方を流れる滦河が北から渤海に流れ、青々とした麦畑が蜿蜒と続き、土の家が見えていた。

空の旅は３時間４５分に過ぎず、１９・３０に北京空港に到着すると、中国はサンマータイムである。

月齢１０日の月が皓々と照つている中を、バスは市街地に向かって走った。８ケ月振りに北京の空気を吸つたが、何一つ胸の鼓動を高めるものは湧いて来ない。満州族出身の「佟」さんの案内で、真っ暗い日壇公園で夕食をとり、オープンしたばかりの国際飯店に到着した。北京駅前に堂々と聳える２９階建の中国自慢のホテルである。

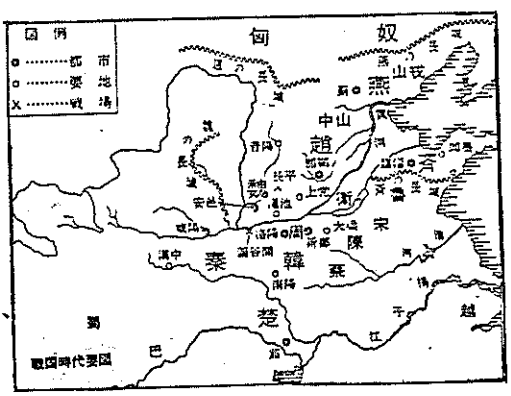
5月28日（金）晴

暮田峪長城

午前中は本年開放したばかりの暮田峪の長城の見学であつた。所要時間約１時間３０分の距離にある此の長城には、４月に運転開始した日本製のケーブルカーが設備され、我々のような老人には八達嶺の長城よりも適している。東端の山海関から西端の嘉峪関の長城までも見た私にとつては、余り興味は湧いて来ない。

八達嶺に比較すると規模は至って小さく、新設した長城の両端に連なる昔の残骸だけが、唯一の価値ある見所であろう。アカシヤの白い花が咲く長城にたたずみながら、往時の激しかつた攻防の干戈のために、長城の路傍に白骨が累々と重なつた情景を想起して、一時を過ごしたのであつた。

長城の歴史的由来



万里の長城は雲際に蜿蜒として蛇身のような片鱗を現わし、峰が起伏して山脈がそれに従うように連なるのは、山が活きている感じだ。ここに歴史的由来と興亡の概要を記してみる。

東は旧満州との境となつていた山海関から、西は甘蕭省の砂漠の中の嘉峪関まで６０００kmという大城砦は、秦の始皇帝の一夜の夢になつたとすると、正しく素晴らしいことに違いない。然し乍ら万里の長城は始皇帝よりも約２００年程前に、部分的に出来ており、始皇帝はこれに増築を加え、大修理を施して完成したものである。（上図参照）

戦国時代の北部に位置した燕・趙・秦といつた国は、長城を築いて匈奴を防いだ。

始皇帝が全国を統一すると、長城をつないで防備を固めると共に、蒙恬という大将の指揮する３０万の大軍を投入して匈奴討伐を行わせた。しかし中国が秦末の大乱に陥ると、再び匈奴は中国の北辺に深く侵入している。

始皇帝は帝王の権威と国力で幾百万という壮丁を動かし、幾万の人を犠牲にして破天荒な工事を完成させたから、長城といえば始皇帝を連想させるのは無理はない。

長城が最初に築造されたのは魏の時代で、前３４９年に「魏の恵王、長城を築き固陽を塞ぐ」と記されている。（陽は北側、陰は南側）そのころ北方には東胡とか楼煩とかいう種族がおり、頻繁に辺境を脅かした。

これに対して恵王は築城を思い立ち、そのご趙の武霊王とか、秦の昭王とか、燕の将軍であつた秦開とかが相次いで築城した。これらは始皇帝の築城に先立つこと１００年から２００年の間である。

今日のように飛行機のある時代と異なり、長城一つが戎族の南下を防ぐ唯一の方法であり、強敵防衛の最善の方策であつた。このためには如何なる努力も、如何なる費用も惜しまず実施したのである。今でこそ歴史的遺物として無用の長物の偉観だが、漢民族の安寧と生存を確保するための重要なものであつた。

史記によると、「長城の建設は老弱賦役幾百万なるを知らず」と記しているが、民の怨恨を買つたことも夥しく、総監督の蒙恬も服毒自殺したほどであつた。

始皇帝は大長城を築造して万代不易と自惚れて死んだが、北方の形成は彼の死後、俄然一変して、辺地に移住して労役を命じられた者は続々と守備を離れて帰還し、北方の蛮夷は猛威を振るい出した。

匈奴が勃興して東胡を滅ぼし、楼煩、白羊の諸戎を破り、蒙恬が平定した領土の大部分は奪回されてしまつた。

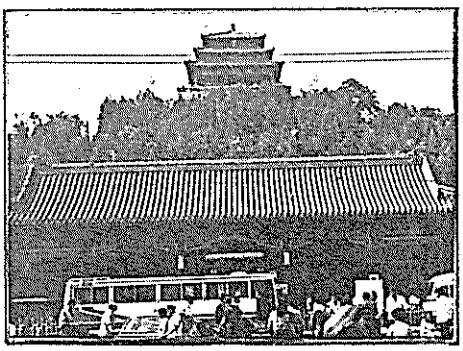
漢の高祖の時代となつて、自ら兵を率いて北方に親征したが完全に失敗し、匈奴と和を結んで毎年酒米を貢ぐこと約束して、南下を中止させようとした。漢の孝景帝のときに武将・霍去病が胡軍を破り、匈奴は昔日の勢威を失つたが、長城は万代不易の要塞とならず、価値を疑われるに至ったのである。

長城は其の後も絶えず増修築され、北魏時代には漠南（砂漠の南）の地に外廓を築き、黄河に至る千里の間を堅固にしたと記されている。北魏の後、更に北斎時代にも幽州（北京附近）の北部に九百里の長城を築いたとあるが、始皇帝の死後七百年のことで、殆ど荒廃しかけたものの修復工事だつたかも知れない。（２頁地図参考）

その後、南北朝、五胡十六国を経て隋の煬帝の築城等、長城をめぐる興亡史をたどると限りがないようだ。

長城の各所には「望楼」が設けられているが、これは見張台であり狼煙台である。敵の来襲に際して夜は狼煙を上げ、昼間は煙を上げて通報したのである。その為に城壁の上に築いたものもあり、或は山上の要所に築いたものもある。また所々に「通道」と称する暗路を穿ち、城壁の上から壁外に下りる通路も設けられている。

景山に登り北京の回顧



午前は一方が重畳とした連峰の雲際に没し、片方は深谷に落ちるという長城を見学した。午後は印を押すように天安門広場に案内され、故宮へと移った。幾度となく見学した私は、数名の人達と故宮の裏門にバスで先行し、４８年ぶりに景山に登った。

明朝末期の永昌元年（１６４４）３月１７日、李自成の指揮する農民革命軍は、明朝に最後のとどめを刺す狙いで北京を包囲した。翌１８日、彼は特使をさしむけて明朝１７代皇帝の崇禎帝に帝位を譲るように迫ったのである。

皇帝はこれを拒絶し、皇后の自決を見とどけて１５歳の皇女を自ら斬つた。１９日の未明に至り、彼は独りさびしく景山に登り、そこの寿皇亭で縊死した。

皇帝の長寿、皇朝の久遠を祈願するための寿皇亭で、皮肉にも明朝２７７年の歴史の幕を下ろしたのである。崇禎帝は歴史の無常感を人一倍かみしめながら、梁に自ら縄を懸けたことであろう。（上の写真は景山の寿皇亭と入口の門）

故宮の裏門の北側に道路をへだてて景山の門がある。中に入ると直ぐ「崇禎帝自縊処」の看板があり、矢印に従って寿皇亭に登った。東京タワーのように四方に遮るものは何一つなく、一望のもとに北京市街を展望できる人工の山である。

景山は人の波で埋り、寿皇亭の真中にある崇禎帝の墓石の上にも、十数人が腰をかけていた。過去の歴史を知らないのか、時代の流れを覚えるのであつた。

景山の西側にある北海や中海の湖面は３４°の強烈な陽の光を反射し、水辺の景色は影を逆さにして池の水に映つていた。北に眼を移すと鼓楼が手に取るように見え、私の脳裏には北京の歴史が彷彿として浮かんで来るのであつた。

北京の歴史は古く、約４０００年前の夏の時代に「幽州」の名で史書に現われている。初めて一国の都に選ばれたのは前１０００年頃の周時代で、戦国七雄の一つの燕の都として「薊（ケイ）城」と呼んだ。（２頁要図参照）

秦の始皇帝が天下を統一すると薊（ケイ）は華北の要衝となり、以降約１０００年の間も其の地位を守っている。唐代になると北方民族が勢力を増し、五代・十国時代の９３６年には契丹（キッタン）人の「遼」が此処に都城を築き、南京または燕京と命名した。続いて１２世紀には女真族（満州族）が建てた金王朝（１１５３）の中都となり、蒙古の元朝（１１７３）の大都となつた。明朝に入つて第三代光楽帝は都を南京から「北平（ペイピン）」（当時）に移し、「北京」と改称して現在の北京の原形を造った。

初めて私が中国を訪れた時の北京には、高さ約１０ｍ、厚さ約２０ｍ、東西約７㎞、南北約５㎞の煉瓦造りの大型で堅牢な城壁があり、石畳の上に屋根をそらした数々の楼門が聳え、その堂々たる偉観は清朝３００年の栄華の名残をとどめ、中国を表徴する建築美の都であつた。

然し乍ら、古い長安（現在の西安）の都をモデルにして造った北京は、開放後はすつかり変貌して昔の面影を消してしまつた。四百余州に号令した在りし日の城望は見られず、裸になつた故宮（紫禁城）だけでは王城の価値は半減であろう。

塗炭の苦しみ

景山に初めて登った時の説明に、皇帝が北京市民を「塗炭の苦しみ」から救うためと称し、景山を次ぎのように利用したという話があつた。

人工の景山の山の中には何年分の石炭が埋蔵してあるから、極寒の越冬にも何等の不安はないと宣伝して、市民を安心させたと云うのであつた。明・清のどの皇帝かは記憶がなく、事実か否かも不明である。

塗は泥水、炭は炭火のことで塗炭の苦しみとは、泥水や炭火の中におとし入れられたような、即ち水火の苦しみと云う意味だ。塗地の苦しみとも言われている。塗炭の苦しみから開放されたいという人々の願いは、中国の史書ばかりでなく、日本の文献にも頻繁に使われている。

非道の帝王と称された夏の桀王の虐政に叛抗し、これに代わって天子の位に就いた殷の湯王は、桀王の不徳、悪虐の行為によつて民の受けた異常な苦難を、「民、塗炭に墜つ」と言った。それが「塗炭の苦しみ」という言葉の語源とされているから、私が初めて景山で聞いた説明は不明な点も多いようである。

夜、北京駅を発つ

景山を下りてから久し振りに北海公園に足を運び、金時代に造られた世界最小の王城に登った。北海入口の左側にある王城の高さは約５ｍ、周囲約１００ｍの小さなもので、初めて知った新知識である。

ツアーと合流して鉄筋コンクリート製の鼓楼に登り、友誼商店等を回って北京駅に着き、２１・１８の寝台列車を待つことになつた。

北京駅は昔の位置から１０００ｍほど東に移動した処にあり、この新駅から何度か乗車したが、昔の駅の風情が懐かしく思い出される。

旧皇城であった内城の大きな城壁に沿って列車は進み、正陽門停車場（旧駅）に着くと巨人のような城楼が聳えていた。ありし昔のままの主な宮殿を、九重に取り巻いていた正門の正陽門は、私の記憶から永久に消えることはない。

内城から眺めた紫禁城は豪宏華麗な周囲と相俟つて美観の極致であつた。規区整然とした街路と緑樹の屋敷町や、外国軍隊の駐留していた光景は懐かしい思い出だ。

首都の駅に不相応な暗い待合室で、小一時間ばかり待たされた。一般中国人の待つ待合所は群衆が渦を巻き、依然として大きな荷物を抱えて悪臭が漂い、この光景だけは昔の影を残していた。

５月２９日（日）小雨

大同

大同は内蒙古との境界を走る天与の防壁・万里の長城の南、５０㎞の位置にあり大同盆地の中心である。空に炭鉱の煙が立ち上る荒涼とした古都に、黎明の５・３０に下車した。小雨であつた。未知の大同も年老いた性か心に波が立たない。

人口９６万の山西省第２の街が歴史に登場するのは、３０００年前の周王朝の時代

で、その後、漢代には匈奴防衛の根拠地となつた。１５００年前の南北朝時代には、長城の北から興った鮮卑族（外蒙古やシベリヤにいたトルコ系遊牧民族）の「拓跋」が南進し、３９８年に北魏を建国した。

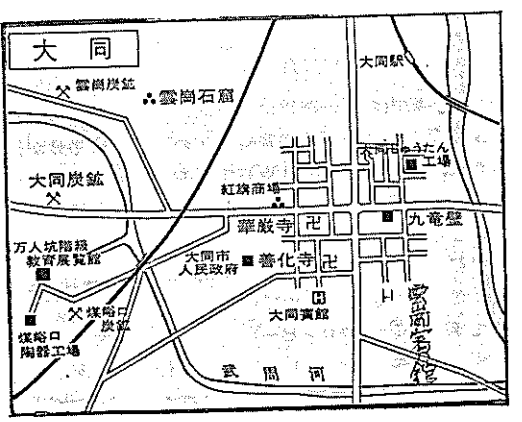
やや詳細に記述すると、漢が滅び三国時代（魏・蜀・呉）を経て五胡十六国時代に移る前後から、華北の地は匈奴・羯・鮮卑・氐・羌の五胡に占領された。これらの異民族は匈奴が山西南部に自立して漢王と称したことに刺激され、それぞれ華北に侵入して国を建て、これに漢人も混じって抗争を繰り返し、約１３０年間に１９ケ国が或は興り、或は滅んで行った。

３８６年、北魏（北朝の一つで後魏ともいう）の始祖の拓跋（道武帝）が盛楽に都し、次いで平城（大同）、続いて落陽へと移り、４３９年に大武帝が江北を統一した。しかし再び分裂して北魏と漢民族の宋とが対立することになり、隋が南北を統一する（５８９）までの１５０年間が南北朝である。

上記したような経過をたどり、北魏が４９５年の洛陽に遷都するまでの９７年間、大同は国都「平城」として繁栄し、その後の隋・唐時代には衰退したが、前宋・遼・金時代には副首都の西京として賑わいを取り戻した。

元来ここは北方諸族の侵入ルートの関係から匈奴防衛の基地となり、明・清時代には蒙古に対する「九辺鎮」の一つとなつていた。即ち大同を攻略したものは中央本部を征服できたのであつた。

華厳寺



大同駅から約１５分の所にある雲崗賓舘で休憩し、９・３０より小雨の中を市内観光に発つた。長い歴史を感じさせる街並みは、開発途上のために泥まみれである。しかし何処かに古都の風情が漂い、珍しく松の街路樹が続いていた。

標高１０００ｍの大同は肌寒く、１０分たらずで華厳寺に到着した。此の寺は上・下の華厳寺に分かれており、下華厳寺は改築中のため上華厳寺だけの見学となつた。

寺の創建は華厳宗が盛んであつた遼代の１０３８年で、当初は遼の皇帝像が奉納され、皇室廟の性格を持っていた。

山門から境内に入ると円形の門がある。これには人間を丸くすると云う意味があるらしい。正面は金代（１１１５～１２３４）に建てられた朱塗りの大雄宝殿（本殿）で、桁の長さ５２・５ｍの堂々とした中国最大の木造仏殿の一つである。古代建築の粋を結集した大雄宝殿は、飾り気のない古色蒼然なものだ。

大雄宝殿の額の下に、万暦戊午年に書いた「調御丈夫」の額が掲げられていた。これは釈迦の別名とも云われ、仏教崇拝の高さが窺われて驚嘆の眼を注いだのである。上・下寺とも東面して建つているのは、契丹族の日の出る東を崇める信仰と、住まいの習慣によるらしく、漢民族の建てた寺院は南面している。

宝殿内の中央には中国最大の木造の仏像３体が安置され、漢民族の慣習を継承して

中央の３体の木造の両側に塑像がある。これらの仏像は過去・現在・未来を表現し、さらに両側に１０体の守護神の立像が並んでいる。

美事な格天井の絵は一枚づつ異なり、壁面はくまなく壁画をめぐらし、本堂内の屋根裏のタルキは裸のままである。古い建造物を眺めて仏像に合掌すると、自然のうちに襟を正すのであつた。

九龍壁

華厳寺から東へ３分、街の中心部にある九龍壁は、北京の故宮・北海公園のものと並んで「九龍壁三絶」といわれ、全長４５・５ｍ、高さ８ｍ、厚さ２ｍの大同の九龍壁は他より一段と大きく中国最大である。（上の写真は九龍壁の一部）

明代の１４世紀末、洪武帝の時に建造されたもので、明朝の始祖・李元章の第１３番目王子の王府（府は邸宅）の前にある障壁（目かくしのための壁）である。壁面には５色の瑠璃瓦で造られ、飛雲に乗って吼える九匹の大龍が美事に描かれている。実に素晴らしいと絶賛したい絢爛豪華なものだ。

晴れていると、前にある池の水面が動くたびに、龍が勇奔して飛び上がるように見えるだろう。小雨が恨めしく感じてならない。

此の地は北方民族の喉元を扼す要衝であり、興亡の歴史上からも王子を大同に派遣し、明朝の安泰と朝威を誇示する意図があつたのであろう。

善化寺

九龍壁からバスで南に３分のところに善化寺がある。（６頁地図）華厳寺と同じく華厳宗の名刹で、善良な人間に感化させるという意味から建立した寺である。

唐の開元年間（７１３～７４１）に創建されたから開元寺という原称もあり、五代の後晋（９３６～９４６）時代に大普恩寺と改名された。遼と金の戦争によつて消失したが、明代になつて修復して善化寺と更名した。俗称を南寺ともいう。

威徳護世と掲額した天王殿（山門）を入ると三経殿で、その奥が大雄宝殿となつている。三経殿は金時代の建築様式であり、殿内に三尊の塑像（中央の大日如来、左の文殊菩薩、右の普賢菩薩）が祀つてあるから三経殿の名称が付いている。

大雄宝殿は遼代の様式を伝えて、大雄宝殿としては最古最大を誇つている。また右前方に普賢閣、左前方に文殊閣の遺蹟があつて、往時の七堂伽藍を偲ばせていた。

大雄宝殿には微笑を浮かべた釈迦を中心にして、５体の塑像が蓮台上に正襟端座し、天井の構造が斗八藻井となつているのは珍しい。殿宇の中の両側に亀の台座の上に碑が建ち（唐代のもの）、奥に２匹の龍が描かれていた。

一方、三龍壁が外壁の円形の窓越しに見えており、寺の奥床しさが一段と増し、自然のうちに善化されるようであつた。

大雄宝殿には燈明・華・香がお供えされていたが、其の事に就いて少し記しておく。

「燈明」とは仏に献上して供養する燈火である。この世は貪欲、怒り、嫉妬心、猜疑心などの果てしない闇の世界だ。我々が本当に求めているものは、意識するとしないに拘らず、人間の心の暗黒を突き破る光明がほしい。これが言葉の正確な意味の法燈である。

この法燈が法燈となるのは、人間が私心を離れて、清い汚れのない本心に立ち還つた其の瞬間である。自己が無心となつて私欲の追求を離れたとき、始めて仏の智恵（光明）が我々の行く手を示す光となる。

自己が謙虚な心になつて仏に燈明を捧げるとき、其の献げる燈明がひるがえり、我々が真に求めている生命の道を照らし出すのである。これが燈明の意味である。

「華」は愛情をあらわしている。花を見て怒る人はいない。この愛を仏教では慈悲というのである。慈悲とは最高の友情のことで、特定の人だけに向ける友情でなく、総ての人達に注がれる友情のことだ。

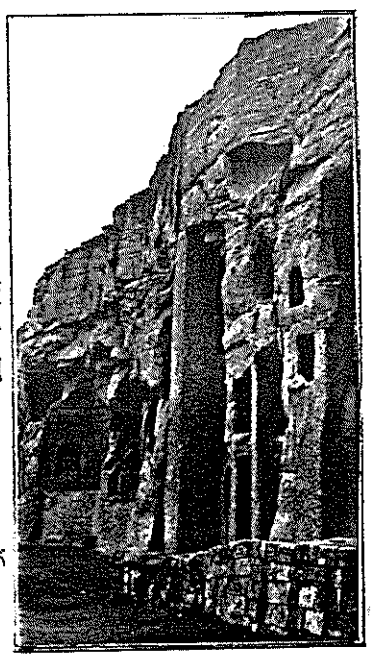
人生の苦痛に呻き嘆いたことのある者だけが、苦しみ悩んでいる者を真から理解でき、癒すことができるのだ。その為に我々は仏前に華を供えることによつて、限りない慈悲（愛）の心に目覚めるのである。

「香」は人の信心を仏に通じる使いだと云われている。心の媒介者である。香華といわれるほど「香と華」は供養を代表するものである。インドでは体臭を消すために香を使っていた。

香供養を行うときには粉末の香を使用したのが普通だつたが、何時の間にか線香を使うようになつた。（中国では線香は時を計るのが起源だと云われている）

線香は一度頭に火をつけると、燃え尽きるまで休むことを知らない。初心忘るべからずと云うことだ。一つの事に心を動かしたなら、全身全霊を打ち込んで精進することを教えている。時間がたつても燃えつづける線香に、我々は精進を続ける人間の象徴を見つけたいものだ。

雲崗石窟（右写真は石窟の一部）



ホテルを１４・３０に出発して大同の圧巻・雲崗石窟へと進んだ。新市街は建設途上のために悪路が続き、古い寺院も壊されてアパート群に姿を変え、宗教は阿片なりといつた言葉が、現実となつて展開していた。

松並木の市街地から離れるにつれて周囲は黒色に一変し、大炭鉱の町の様相を呈していた。見えてきた狼煙台は幽趣を喚び起こし、寂寥とした街道にも観音寺の三龍壁が建ち、眼の保養となつていた。

乾電池を造つている部落の屋根は、水平に近い土造りだ。降雨量の少ない地方では家屋は簡単に出来ており、見た眼には粗悪で殺風景である。

左手の武周川のほとりに広大なＳＬ工場が蜿蜒と拡がつていた。年間の生産高は３６０輌と云われているが、矢張り時代おくれの感じがする。

車窓から眺める武周川の両岸は、黄土層が堆積して台地をつくり、流水のために深く侵食されて随所に黄土地形を現わしていた。中国文明の起源が黄土文明だと思うと、武周川の渓谷は興味をもつて眺められる。

川に沿って国立の炭鉱町が、ぼんやりと小雨を通して網膜に映つてきた。全国に２７０ケ所もある炭鉱町の一つで、遠く彼方には石炭列車が白煙を上げて走っていた。

濃い緑の山脚に眼を流すと、台形をなしている山腹に石窟群が見え始め、写真で見た通りの武周山南麓の景観である。長く「閻錫山」の山西モンロー主義に固められていただけに、武周川の改修工事が行われていた当時の跡も残り、興亡の歴史が窺えるのであつた。

雲崗石窟は北魏の首都であつた平城（大同）・西方１６㎞の雲崗または武州寨という一寒村にある。全長は東西に約１㎞、仏像は周壁に彫られて雄大な石窟群をなし、洞窟の数はは５３、石仏の数は大小合わせて約５万１千体である。往時は１１万体もあつたらしく、寺としては石仏寺と云っている。

中国全土には石窟群の数は５２６ケ所あり、６大窟が有名である。即ち○敦煌・麦積山・炳霊寺・大足・○竜門・○雲崗である。日本では三大石窟と云っているらしいが（○印）、中国では通用しないと説明された。我々の通訳をつとめた「武」さんは中国考古学会員の一人として、専門家らしく話してくれたのは幸いであつた。

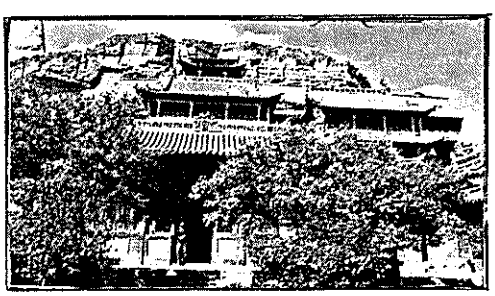
北方民族の拓跋から出た北魏の弾圧に泣いた高僧「曇曜」は、北魏第４代皇帝の文成帝（在位４５２～４６５）に奏請して、帝王の供養のために開いたのが始まりであつた。現在の第１６窟～第２０窟が其れで、曇曜５窟と呼ばれている。

以降、孝文帝が洛陽に遷都するまでの３０年間に、第１～第１５窟が掘られて最盛期を迎えた。遷都後も北魏の末まで掘り続けられ、大小５３の石窟には小は数ミリ、大は高さ１７ｍのものもある。石窟はまた造営された年代によつて三つに区分され、各々が小さな谷によつて境をなしている。

武周山南麓は楊柳の林で覆われ、山門を通して碧瓦・三層の楼閣が見えていた。高く聳える各楼は我々を睥睨し、其の中を第５窟から順次に説明が始まった。このとき不思議にも小雨は止み、天は我らに組したのである。（下の写真は山門附近）

第５窟の高さ１７ｍの坐仏は雲崗最大の石仏で、窟壁にはびっしりと仏龕（龕はハコの意）と仏像が彫られている。

第６窟は規模の大きさ、内容の豊富さ、彫刻の見事さ、技法の素晴らしさ、そのどれを取っても雲崗石窟の中で代表的な洞窟である。中央に彫りぬいた方形・２層の塔柱があり、龕の南に坐仏像、西に倚座仏、北に釈迦坐像、東に交脚弥勒菩薩が彫つてあり、周囲には２８００体の千仏像も刻まれている。敦煌を思い出すのであつた。



この第５第６窟は一対窟で、孝文帝が平城に居を移した後期に作られたもの。二つの洞窟の前には５間４層の楼閣が建ち、何れも本尊は三世仏となつている。

第７窟の北壁には本尊の三世仏（前世・現世・来世）が、釈迦の菩薩道を行った故事を題材とした絵（本生故事という）の浮彫と、仏教伝来の故事が彫刻されている。天井部分

の飛天は特に美しく、訪れる人の眼を奪うものがある。

第８窟の東にあるシバ神と、西のヴィシェヌ神（ともにインドの有名な神）が、坐って対置しているのも珍らしい。第７・８窟は孝文帝初期のもので、両窟の前には３層・木製の庇があり、前室と後室に分かれている。特に眼を引き付けたのは、第５・６窟と第７・８窟の外にある石碑で、亀の形をした台座に建っていた。

第９・１０窟の一対窟は４８４～４８９年のもので、第９窟の本尊は釈迦、第１０窟は弥勒菩薩である。このように二つの仏像を組み合わせたのが第一期の特徴である。

第１１・１２・１３窟は組になつた石窟で、第１２窟が中心である。前に大きな柱があり、入口は３つ、後室の入り口の上に明かり窓が掘り抜いてある。第１２窟の天井には奏楽天人像が彫つてあつたが、少数民族の２４種類の楽器で面白い。第１３窟の本尊は交脚弥勒菩薩で、高さ３ｍの石仏の腕の下で、腕を支えるように立っている仁王の彫像が眼を引いていた。

第１４・１５窟は第１１窟以西の断崖の上部にある小さい窟と、第２０窟以西の諸窟と共に、第３期の造営によるもので特別な説明はない。

第１６・１７窟は第１期の造営で、第２０窟までが曇曜５窟の一部だ。第１６窟の本尊は釈迦立像の１体、第１７窟は菩薩をかたどつた未来像の弥勒交脚像である。

第１８窟の中央には千仏を彫りこんで袈裟をまとつた釈迦の立像がある。これは手に独特の表情をもつた高さ１５・５ｍの本尊で、仏弟子の群像が壁の上部に彫られている。

第１９窟の中央に高さ１６・８ｍの釈迦坐像があり、その規模は雲崗第２の大きさ。第１８・１９・２０窟は雲崗石窟の中でも最も早く掘られたもので、北魏王朝の５人の皇帝を模して彫られたものという。

第２０窟の中央にある釈迦の坐像は高さが１３・７ｍ、ふくよかな顔に薄い唇、高い鼻、両肩はがっしりと広く、その表情は荘厳までに美しい。

光背の火焔紋と坐仏、飛天などの浮彫もことのほか壮麗だ。（右の写真は第２０窟と私）

窟の前壁は遼代以前に崩壊し、仏像は露天にさらされているが、石質が硬く胸から上は風化されずに、完全な形で保存されている。

この第２０窟は雲崗石窟の中でも最も優れた代表作で、写真も自由に撮影できる。この大仏がまとつている衣装は、少数民族の衣装だという。

仏教東漸の潮流を受けて敦煌の影響が大きく、西域の様式を伝え、インド、パキスタン文化が中国に伝わつた経路を示しているようだ。

これで日本で云う中国三大石窟は総て拝観したしたのである。唯一つ残っていた雲崗石窟の見学も叶えられ、極まりない感激だ。

当時の絢爛に咲き乱れた仏教芸術を、この眼で眺めた。天下は麻のように乱れて文字通りの群雄

割拠、弱肉強食の時代に、今日の蒙古族の祖先である鮮卑族が、宗教は自分の心の安住の地として、仏教文化の花を雲崗の崖に咲かせたのは、驚嘆の至りである。

朔風の中で育った者の激しい気性と鉄のような意志が、この一寒村に不滅の遺産を残したことは、偶然ではないかも知れない。

最も美しい芸術作品は、何ものにも汚されない、芸術家の純粋な幻想を表現するもので、美は究極の原理、最高の目的であろう。雲崗石窟の美は憤怒の情を和らげ、美しいものは永遠の幸福を約束するように思えたのであった。

見学が終わつたところで通訳の武さんは、次ぎのような面白い漢字の説明をした。

へんが「兎」、つくりが「蛇」という漢字は、一字で「幸福」と言うそうだ。此の字が山門の前の建物の中に書いてあつたのも面白い。

仏という字は、へんが「人」、つくりが「費」の合字で、費は人間を否定することだと云う。即ち仏は優れた人間を超越しているのである。学者通訳の蘊蓄のある解釈に興味をもつて拝聴したのであつた。

古瓦のかけら一つでも悠久の歴史を語るものはないと、一片を拾って記念とした。

5月30日（月）晴

大同～五台山

本日は恒山の懸空寺を参拝して五台山に向い、難路を踏破するバス旅行の日である。

朝早くホテルの窓から外を眺めながら、大同の遠い歴史を回顧していた。極寒の或は極暑の砂漠へと出陣した戦旅は、不帰の客となる運命を背負った、荒涼としたものであったと想像する。愀然として悲風の奏でる山西の北境・朔州の光景が、楊柳の繁る間から迫ってくるような感じがするのである。

当時の戦争は国王の商売の手段であつた。そして良い戦争があつた例はなく、反対に悪い平和もあつた例がない。何れの日にか胡虜を平らげて遠征を止めんと、嘆いていた様相が窺えてくるようだ。

６時を過ぎて曇天の世界は明るさを帯び、煤煙の昇る殺伐とした炭鉱町が窓の外に映っていた。その中に武周川の一条の流れだけが白く見えていたが、愈々お別れだ。

９時に出発して大同南方７３㎞にある恒山の懸空寺に向つた。大同の一辺が３・６㎞の城壁（現在は土壁のみ）だけが、我々に黒い影を残して見送つていた。南へ走る悪路は工事のために泥濘と化し、その中を石炭を満載した馬車が通過して行つたが、実にのんびりとした慢々的な光景であつた。

渾同（渾源～大同）街道のポプラ並木の木陰から、微かに恒山々脈の薄い輪郭が彼方に浮かび、次第に空は晴れ上がって来た。山西といえば山々の連続した地形だと連想していたが、侵蝕された黄土地形にも大平野が展開していた。北魏が大同に都したことも首肯けるのだ。

桑乾川を渡って恒山々脈の流れにさしかかると、全く木のない石ころだらけの禿山に急変し、高度を増すにつれて再び黄土の農地が拡がり、千変万化の地形である。

標高１８００ｍの素晴らしい展望の所で休憩となった。其のとき突然、公安の兵士

が駈け寄り、運転手の免許証を取り上げてしまつた。未開放地区のためにバスの停車は禁止だという理由だ。秘密を要する何物もない現状から判断して、違反の理由が理解できない。この姿が中国の官僚的支配の実態である。

運よく我々は約５分程度で前進を許されたが、少々前に到着して写真を撮った西ドイツ一行は、長時間にわたつて停車を命ぜられていた。同病相憐れむべしである。中国は実情を把握して現実にそつた処置を考えなければならない。

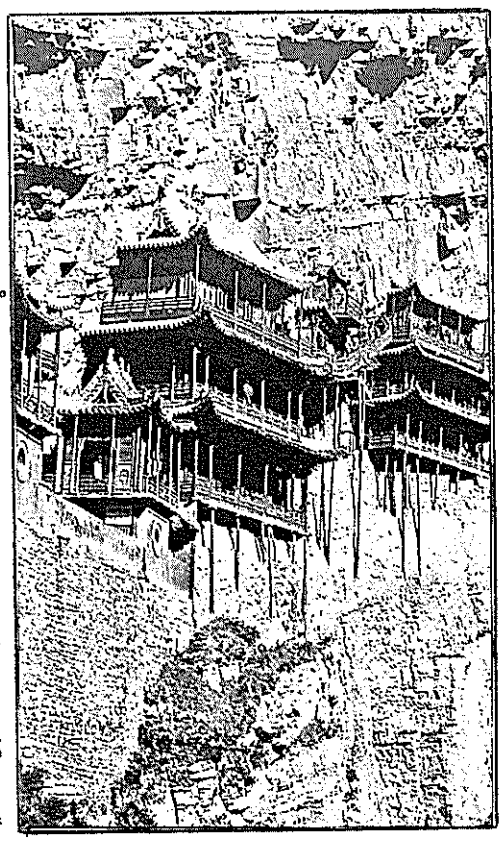
大同を発つて約２時間、渾源の町を過ぎると直ぐに、中国五岳の一つ・恒山の岸壁へと進んだ。（右の地図参照）

五岳とは即ち、東の泰山、南の衡山、西の華山、北の恒山、中の嵩山で、標高では恒山は第２位の２０１７ｍである。

バスは渓谷の河床に下り始めると、右手に絵に書いたような懸空寺が眼に映り、忽然として寂寞な村里の奥地に、忘我陶酔の境を懸崖に展開していた。

懸空寺

北岳・恒山の麓の断崖絶壁に突き出し、宙に浮いているように見える懸空寺は、崖に横穴を穿ち、土台の根太を３分の２ほど崖に差し込み、外に残った３分の１を土台にして建てた楼閣である。この楼閣の上に立つと上も下も絶壁、前を向いても断崖と滝が迫って来る。（右下の写真）



懸空寺は北魏末の６世紀の建立で１４００年の歴史がある。寺は三つの部分になつて崖に懸けられた空中の楼閣で、実に珍しい建物と云わなければならない。

崖の上部は寺を覆うように岩が突出して降雨を防ぎ、四周の山は防風壁のように聳え、日照は夏でも４時間、冬は全く陽が当らない。

建築上の木造の腐敗する原因は、日光・雨・風というから、実に条件の揃った適地に建てたもので、力学的にも問題はないという。

東向きに建つた此の寺は、仏教・道教・儒教の三者一体の聖地の一つで、人が一人しか通れない廊下と階段を渡つて、参拝しなければならない。

寺の右端の楼閣（左の入口から最も奥）には、中央に釈迦像、右に孔子像、左に老子像の塑像が祀られている。

その他の楼閣には仏教の像が１０、道教の像が５、儒教の像が１の割合で祀られ、全部で８０体の木・塑像が祀られている。

名称は仏教では寺院、儒教では廟、道教で

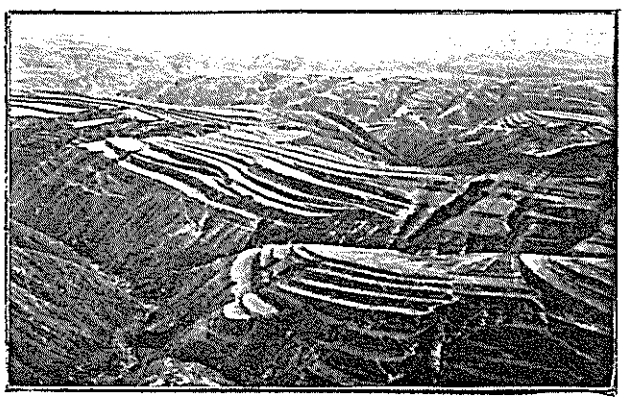
も廟と称し、特に道教では大きいものを廟観という。新知識を得たのであつた。

唐代の詩人・李白が此処を訪れ、実に「壮観」な景色だと感嘆の声を発したことから、対岸の断崖に「壮観」の２字が彫り込まれている。千刃の岸壁が半天にかかり、高峰は鋸のように切り立ち、天地という大きな部屋に寝起きしているような錯覚に陥る感じだ。

夢の世界と現実の世界が区別がないような壮観さを、天下の奇勝というのだろうか。空に懸る聖地の周囲には１８ケ所の名所があり、年間の中国人観光客数は約１５万人、外国人は約７０００人という。傲然独特の誇り高い建築美は、益々世界に名声を博すのではないだろうか。

約１時間の見学に満足して下山し、昼食は渾源（県庁所在地）の招待所であった。山の中の僻地だが道路一杯の市場は賑わい、用意周到にと中国靴を求めて、これからの山登りに備えたのであつた。

恒山



渾源平野の未舗装道路に揺られながら、恒山々脈の間道を走った。奇岩怪石の多い渓谷は彷彿として天山々脈を想起させ、険にシルクロードの光景が浮かんでいた。

不毛の悪路は又、紀元前・漢の武将達の匈奴作戦を連想させるのであつた。海を抜くこと２０００ｍの連峰の中を、補給は如何にしたのであろうか。食糧の徴発は不可能に近く、羊を連行する自給自足であったのか。山地への大軍の投入は危険千万である。（上の写真は黄土地形の農地）

大同で匈奴と戦った漢の高祖の劉邦は、４０万の匈奴に包囲されて遂に和を結び、皇女を単于（王）に嫁がせたことまでも脳裏に閃いていた。兵馬倥偬の間に山西省に入った私には、多くのことを思い出させるのである。

恒山々脈の峠を越えると忽然としてそ地形が変化し、羊を放牧している光景が網膜に映っていた。上の写真のようなグランド・キャニオンに似た黄土地形もあり、河川敷の岩石を除去して僅かな農地を開拓する農民もおり、環境の変化に応じて智恵を働かしていた。

恒山々脈を下つて水無川の沙河を渡り、河と同名の沙河部落で小休止した。黄砂の砂塵が舞い上がつていた沙河は、太原～北京間の鉄道が通り、僻地の小部落とはいえ交通の要衝であった。

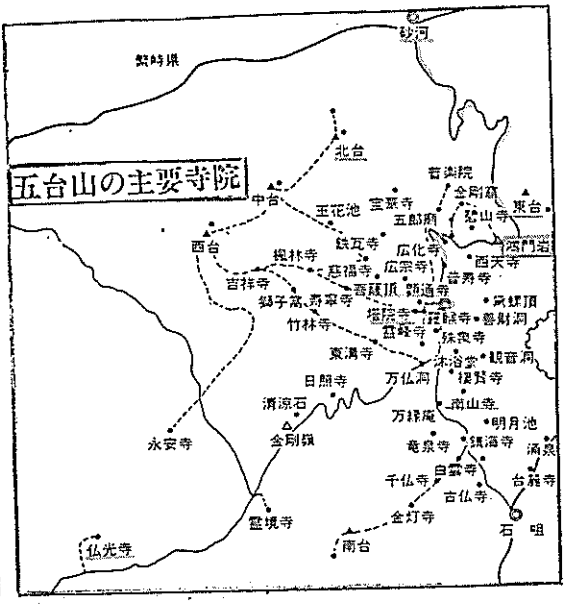
五台山へ

バスは再び南に横たわる山に向かった。五台山連峰である。本日の宿泊地となつている五台中央の「台懐鎮」までの行程は、約１時間３０分だと告げられた。自然の大障害をなす３０００ｍ級の高山を越えるのは、恒山以上に険しいものと覚悟した。

五台山の渓谷にも同じく、猫の額ような狭い農地を開拓する姿が散見されていた。

大中国の広大な国土ながら山岳民族は想像以上の辛苦だ。文化代革命の酣であつたころ、「農業は大寨に学べ」と叫ばれたが大寨も山西省であり、未だに現実問題として残っていたのである。

標高は次第に高さを増し、峰々を覆つた空に陽が照り出して、車中の温度は汗ばむほどに上昇した。恒山と違って五台の山には、自然に生えた僅かの樹木が点々と生え、高山植物は今が盛りと花を咲かせていた。



３０００ｍ級の峰を取り巻く空間は晴れ上がり、西の彼方に見えて来た山頂の残雪は白く反射し｛３０５８ｍの北台（上の地図参照）｝、いよいよ五台の山に突入した実感が込み上げて、聖地の空気が充満していた。

尾根を走る道路の前方に峠が見えて来た。バスは東台（上図参照）に通じる交差点で停車し、道標には標高２５００ｍと記されていた。其の横に「鴻門岩」（上図）と彫んだ石碑が立ち、下車すると流石にひんやりとして肌寒い。

「鴻門岩」は何を意味しているのだろうか。項羽と劉邦が鴻門で会見し（鴻門の会と称して場所は陝西省・臨潼県の東）、項羽の参謀・范増が企てた劉邦の暗殺計画を、劉邦の参謀・張良が看破して、劉邦の臣・樊槍が救出した話は、余りにも有名である。

鴻門の会にちなんで命名したとすると、この峠の地は雌雄を決すような、会見の場所となつた歴史があるのかも知れない。何れにしても山間道を扼す軍事的要衝であることには疑いはない。

五台山は逝江省にある観音の普陀山、四川にある普賢の峨眉山と並んで、中国仏教の三大聖地と呼ばれている（九華山を含めて四大聖地ともいう）。頂上が平らな五つの高峰によって形成されているから、その名があるという。

五峰とは望海峰（２７９５ｍ・東台）、桂月峰（２７７３ｍ・西台）、錦綉峰（２８１２ｍ・南台）、葉斗峰（３０５８ｍ・北台）、翠岩峰（２８９４ｍ・中台）である。（上の地図参照）

平均高は約３０００ｍ、最高峰の北台は３０５８ｍもあつて華北の屋根とも呼ばれており、五峰に囲まれた地内を台内、外側を台外と云う。台内の周囲は約５０㎞の広さがあり、その中心地が台懐鎮である。（上図では顕通寺の附近）

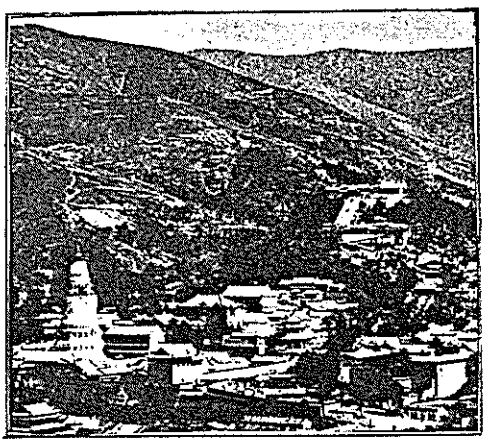
五台山の五峰の台上には寺院が建立されていた。然し乍ら文化大革命で殆どが破壊されてしまつている。世界の文化財を破壊することが即ち、革命の本質かも知れない。過去は総て悪であり、破壊の後の建設を唱えていたことが首肯けるようだ。

暫く峠で冥想に耽つた後、鴻門岩から雪渓を眺めながら急坂を下り、雪の峰が遠ざかるにつれて台内盆地が網膜に展開し、楼閣群中のシンボルである白塔が見えて来た。まさしく台懐鎮・塔院寺の仏舎利塔であった。

バスは門前町の台懐鎮を素通りして南に進み、朱塗りの壁に囲まれた栖賢閣に到着

した。一帯には深山幽谷の気が満ち溢れ、山頂や渓谷に見える古寺の眺めは、名画を実物で見るような景観であつた。
凡てを照らしていた太陽は西山に沈みかけて、忘我陶酔の夜の帳りが下りて行つた。

5月31日（火）晴



空はあくまで青く、深海のように青く晴れ上がった朝を迎えた。周りの峰は日の光を浴びて輝き、仏を祀る寺は神秘的に人間の心情を自然に結びつけていた。
遠い群山は十重二十重に大浪のように拡がり、山深いところに高僧多しの感じがしていた。
中国各民族の仏教徒が信奉する文殊道場であるばかりか、世界の仏教徒が心を寄せる仏教聖地・五台山の歴史を繙いてみる。

五台仏教の歴史

五台の名は北斎（５５０～５７７）に始まり、それ以前は清涼山と称した。四季を通じて氷が解けず、夏でも雪が舞つて暑さを知らない。五峰が聳えて頂上には樹木がなく、土塁を築いたようだから五台と呼んだのである。（上の写真は台懐鎮の全景）
地質学的には２万～３万年前の地盤隆起と、その後の風化侵蝕によつて形成された地形である。高峰だけに展望は素晴らしく、神秘的なことは平地が雨でも山上は陽がさし、五峰をくつきりと浮かびあがらせ、時にはご来迎が見られるという。
ご来迎とは高山の日の出、日没時に霧がたちこめたとき、陽光を背にして立つと、自分の影が霧に投影され、周囲に鮮やかな紅環が現われる現象である。
仏教の五台山伝来は東漢（２５～２２０）のころとされている。経文に「我が滅度の後、大振郡の中間に山があり、号して五頂となす。文殊師利童子、遊行居住す」とあり、五台山が文殊菩薩の霊場として信じられていたのである。
東漢の永平十一年（６８）、インドの高僧・迦葉摩騰（カシャマトウ）と竺法蘭（ジクホウラン）の二人が五台山にやつて来た。ところが其の頃の五台山は道教の支配下にあつて、寺を建てることが出来なかつた。二人は明帝に寺院の建立を願い出た。
永平１４年１月１５日、明帝は道士を洛陽の白馬寺に招き、摩騰らと法を競わせた。摩騰らが勝つて寺院の建立の権利を得たので、二人は霊鷲山（釈迦の修業地）に似た台内の地形を選んで寺を建て、大孚霊鷲寺（孚とは広大な信仰の意）と名付けた。これが頭通寺の前身であり、それけ以降、五台山が仏教の中心となつた。
南北朝（４２０～５８９）に至つて五台仏教は発展し、真容院（現在の菩薩頂）などの１２の寺院が建立した。北斎の頃になると五台山の寺廟は２００余に増え、さらに隋代になると文帝は５台の頂にそれぞれ寺を建てさせ、文殊菩薩を安置した。

中台が孺童文殊である。（右図は台懐鎮の配置図）

盛唐のころ（６２７～８０５）、五台仏教は第２のブームを呼び、９代の皇帝が何度も五台山を訪れて、文殊菩薩の信仰を広めた。全山の寺院の数は３００余、僧侶は３０００人以上を数え、五台に行けば他の寺を見る必要はないとまで云われ、アジオ全域に其の名を響かせた。

勿論、この間に受難の時期もあつた。「三武一宗」といつて、北魏の太武帝、北周の武帝、唐の武宗、及び後周の世宗のころ、仏教寺院は軒並みに破壊された。五台山も例外でなく、僅かに台懐鎮の南西３０kmにある南禅寺が残されただけであつた。

その後、遼、金、元代に修復されたものの、なお盛時には及ばなかつた。

明・清代に至つて五台仏教は再興した。歴代皇帝が仏教を信仰したのみでなく、康熙帝、乾隆帝は２・３年に一度は五台山に訪れた。民国年間も信徒の寄心による寺院の修建が行われた。

現在、寺院は５８、廟は１２４（うち２５はラマ教）である。文化大革命などの内乱によつて破壊されたものも多く、寺院としての体裁を残しているのは半数程度だ。

文革の嵐で、五台山の貴重な経典も散逸してしまつた。しかし文革後、僧侶たちによつて経典は整理され、４万冊に近く整理されたという。

唐代から日本の高僧が相次いで五台山を訪れている。霊仙、円仁、慧遠、宗叡などであり、その後の宋代や元代にも成尋、邵元の各僧が入山し、五台仏教は日本人留学僧によつて我が国に伝えられたのである。

特に「霊仙」は仏教界で最高位である「三蔵法師」の称号を与えられた高僧である。三蔵とは仏教経典の経蔵、律蔵、論蔵の三蔵を集大成した、４千巻を超える一切経をすべて理解した大徳の僧に与えられる称号である。

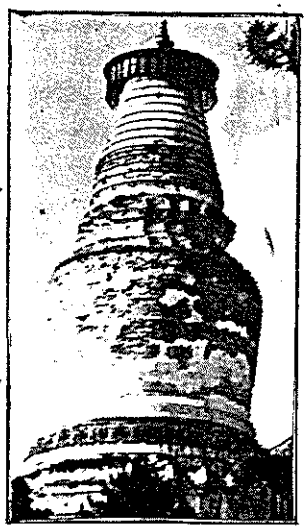
最澄や空海と共に遣唐船によつて入唐し、三蔵法師になつた霊仙は、彼の地で非業無念の死を遂げたのである。享年６８歳であった。もし帰国していたならば、最澄・空海のように一宗を創始したことだろう。

又、「円仁」は最澄の弟子であり、のちに延暦寺第３代座主となつた慈覚大師円仁のことだ。五台山の様子を入唐求法巡礼記に書き、詳しく我が国に伝えている。

我々のような一般観光客は普通、台懐鎮だけを訪れて参拝する。但し仏教徒は大朝台といつて、五台の文殊菩薩の全部にお参りする信者もいる。凡ての寺を巡礼するのには約１ケ月を要すということだ。

北台になると一年のうち１０ケ月も雪が降るから、麓を単衣で出発し、中腹で綿入れに着替え、頂上ではオーバをきなければならない。僅かの間に春夏秋冬を体験するわけで、それだけ仏教徒の気持を引き締めるのである。

塔院寺



標高２０００ｍ・台懐鎮の朝は気温・１０度、清々しい羽化登仙のような気が四周の峰に漂い、新たな心地で塔院寺の白塔を目指して進んだ。

塔院寺の中心をなす大白塔は、明の永楽五年（１４０７）に重復したものである。もともと顕通寺の一塔院であつたが、この時から独立して大塔院寺と称した。（右の写真）

阿育王（アショカ王）が仏舎利塔と文殊髪塔を、此の地に建てたという語り伝えがあつたところから、この名が生まれたという。

現在の白塔は明の永楽五年（１４０７）に重修したもので、高さ５６・４ｍ、周囲８３・３ｍ。塔腰には２５２個の風鈴が付いており、山の風に吹かれて軽い音色を山間に響かせるそうだ。白塔の脇にある蔵経閣には漢語・蒙古語・チベット語など、各種の経本２万余冊が保管されている。

現在、寺は修理中のために見学は許されず、天空に際立つて映つる白塔を眺めて、顕通寺へと向かった。

顕通寺

志気宏放というか、のびのびとした心境になって坂を登り、広場を左に折れると顕通寺であった。塔院寺の白塔は眼の前に聳え、聖地ならでわの雰囲気である。

五大禅処の一つである此の寺の歴史は台の内外で最も古い。東漢の永平年間（５８～７５）に建立した頃は大孚霊鷲寺と呼ばれ、敦煌の壁画にも描かれている。唐の太祖はこれを再営し、則天武后は華厳経を奉納して大華厳寺と改称した。

明の太祖も修築して大顕通寺の額を寄進し、現在の名称がついた。万暦年間にに永明寺となつたが、清の康熙２６年（１６８７）、再び大顕通寺と改名した。現在の建物は殆ど明・清時代に修築したものと云われている。

顕通寺は先ず鐘楼をくぐらなければならない。この２層・朱塗りの鐘楼は五台山の古建築の一つで、「震悟大千」の額がある。大千世界に悟りを響かす事を意味しており、銅製の鐘の重さは約５トン、五台では最大という。

鐘楼を通ると「霞表天城」の額を掲げた楼閣の山門があり、境内には松柏が林立して、恰も深山にある古寺を見ているようだ。

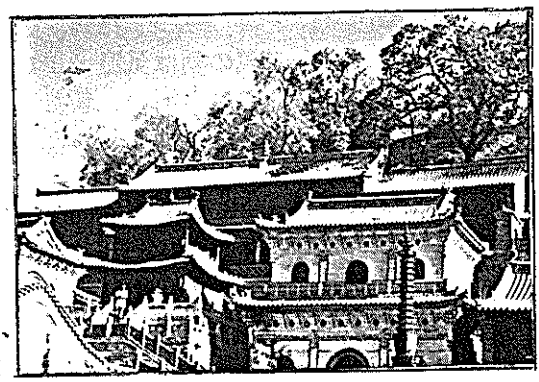
顕通寺は７つの殿堂が南から北に並び、観音殿・大文殊殿・大雄宝殿・無量殿・千鉢文殊殿・銅殿と後高殿がそれで、この殿堂の配列は宮廷建築を模したものである。

明代に修復された観音殿は、観音を中心として普賢・文殊の三大士が祀られているから三大士殿ともいわれ、昔、水陸道場が設けていたから水陸殿とも呼ばれる。

大文殊殿には大小７体の文殊菩薩の塑像があり、真中は大智文殊で、周囲に獅子文殊・智恵文殊・孺童文殊・無垢文殊・聡明文殊の５尊が、背後に甘露文殊がある。文殊殿の前に二つの碑亭がある。一つには康熙帝の親筆の文字が書かれ、他の一つには文字が書かれていないから、無字碑と云われている。

大雄宝殿は五台山では稀に見る大殿で、本殿である。光緒２５年（１８９９）に修

復した此の殿宇は、五台山の法要を行うところで、２０００人以上の僧侶が集まる最高の仏殿であり、康熙帝の親筆の「真権如応」の額がかかつていた。



殿内には中央に釈迦、右に薬師、左に阿弥陀仏が安置され、釈迦像の前には迦葉と阿難の仏弟子がおり、両側には１８羅漢が並んでいる。

無量殿は七処九会殿とも云われるように、殿内に盧舎那仏が祀られている。明代に無量和尚が建てたから無量殿といわれている。また殿内に梁がないから無梁殿ともいわれ、天井がドーム型になつているのも注目するところであつた。

「七処九会」とは、殿内に小さな文字で華厳経を写した塔があり、釈迦が七ケ所で九度、華厳経を講じたという故事にちなんだものである。

千鉢文殊殿には、銅鋳製の千手十一面の文殊が獅子の上に奉安され、一千の手がそれぞれ金鉢を握つている。金鉢の上に釈迦像があり、「千臂千鉢千釈迦文殊菩薩」とも云われている。

殿堂の右の柱に「我此道場一万菩薩常園」と書かれていたが、一万もの菩薩が仏教を広めた処の意であろう。また左の柱には「爾来哲五台聖境至誠」とあり、五台山に参拝すると至誠天に通じるという意味であろうか。

有名な銅殿は千鉢文殊殿後方の壇上にある。明の万暦３８年（１６１０）に造られたもので、銅２０万斤を用いたという。これを造った福登和尚は、後日、訪れた 太原の双塔をつくった人だ。（写真は上は後高殿、下右は銅殿、下左は千鉢文殊堂）

銅殿の内部の参観は許されなかつたが、内壁には小さな仏像が１万体も飾られ、扉には草花や人物が描かれているという。銅殿の前には五つの銅塔が立っていたが、これをお参りすると、五台山全部を巡礼した事になるらしい。しかし現在は東台と西台の２塔しか残っていない。（上の写真の中央右に一塔が見える）

銅殿の背後の最高処に後高殿がある。ここは蔵経閣となつていて、五台山の玉璽大印やビルマから送られた玉仏などの文物、芸術品がおめられている。

この高台に立つと、五台に冠絶した顕通寺の七堂伽藍ばかりでなく、台懐鎮の全景が瞰下できるのであつた。規模広大な眺めは我々を幸福者と痛感させ、人間に深みを与えるようであつた。

菩薩頂

五台山の中心である霊鷲峰の頂上にあるのが菩薩頂で、五大禅処の一つでもあり、五台山最大のラマ寺でもある。下の顕通寺が青廟の代表であるのに対し、上の菩薩頂は黄廟を代表し、五台山に来る人は必ず此の２寺にお参りする。

古くは文殊菩薩の居所と伝えられ、文殊の真容が見られたという事から、文殊寺或は真容院と云われていた。清の康熙帝・乾隆帝が五台山を訪れた時の宿泊所となり、毎年６月１５日に鬼払いの行事が行われている。

菩薩頂は唐の「法雲」の創建で、睿宗の時に「真容院」の額を賜つたという。宋の

太宗も修復し、次いで真宗も修築して大閣一座を造築し、明の永楽も更に修建して今の名称に改めた。続いて万暦・康熙年間にも修復して、黄瓦を用いたのも特徴である。

菩薩頂の名のように天空に写る山門に向かって、１０８段の急な石段が蜿蜒と延びていた。この頂からの俯瞰は五台展望の絶好の地だと、疲労困憊をものともせずに脚を運んだ。（右は１０８の石段と山門）

１０８の石段は即ち、人間の１０８の煩悩を脚下に踏みつけ、煩悩を払う意味を持ち、修業の上からも登頂しなければならない。菩薩頂に登らなければ五台に来たことにならず、否、参拝した事にならない。

山門の「霊峰勝境」の金文字は陽に輝き、天下を征したような、将に霊峰であり勝境の感じがする。境内の古木が生い茂る中を進むと「勅建真容院」と掲げた楼門があり、中院には康熙帝の書いた「五台聖境」の石碑が立っていた。

天王殿の奥にある大雄宝殿は中央に釈迦像、左に阿弥陀像、右に文殊像を祀り、其の前列にラマ像・３体が帽子を被って祀られていた。このラマ像は魏の時代の作である。また五台山のラマ寺の本山らしく、後ろの山頂にはラマ墓林が設けられていた。

続く中殿、文殊殿の建つ境内は松の老樹が日影をつくり、文殊殿内には文殊菩薩の両側に、１８羅漢像がいかめしく並んでいた。

最後に菩薩頂のラマの導師から寺印を戴いたことは、此の上ない感激であつた。仏心に接して、従容として塵を払うような心境に陥ったのである。

高所から眺める菩薩頂の黄色い瑠璃瓦は、文殊の真容をみるように我々を陶然とさせ、宏壮な台懐鎮の絶景に見惚れていた。

中国では、昔から黄色が最も尊ばれて来た。陰陽五行の学説では、東西南北の各方向を別々の色で表わし、黄色は其の中央を示す色とされていた。唐時代には既に黄色は皇室の色とされ、宋代からは、皇帝の住まいだけを黄色の瑠璃瓦で葺く習慣が始まった。

清の康熙帝の息子が此処に棲むようになつて、五台山の絶対の権力を握ぎり、それから瓦も皇室の象徴ともいえる黄色の瑠璃瓦に、ふき替えられたのである。

普化寺

午後の霊地の参拝は、先ずホテルの東南約１㎞にある普化寺であつた。

木立の中を糸をひくように、細くさらさらと流れる清水河の中に、点々と石が置かれて、その石の上を渡って行くのである。

「福星高照」と縦に小さな文字で、「普化禅寺」と横に大きく書いた朱塗りの照壁（大門の外に立てられた目隠しの壁）が建っていた。

寺院を囲む煉瓦の塀には豪華な装飾が施されて、格調の高い寺の感じがする。荘厳な石造りの山門にあつた３つの扉は閉ざされ、横手の小門から境内に入った。

当年７１歳の「蔵明大師」は青眼を開いて我々を出迎え、早速、応接間に案内されて説明を受けることになつたが、その鄭重な持て成しは驚くばかりである。

先ず通訳の「武」さんから大師の紹介があつた。大師は中国仏教会理事、山西省仏教会理事長、五台山仏教会理事長の要職に就かれている。見るからに修業を積まれた風格が備わり、人格識見ともに兼備された高僧である。続く説明内容も素晴らしく、自然のうちに引き付けられて行くようであつた。

文化大革命で五台山の僧侶は各地に離散したが、漸く仏教活動も復活の兆しを見せて、現在、台懐鎮の僧の数は約４００名という。そのうち約２５０名の僧達は、布教活動のために全土に出掛け、心血を注いで五台山仏教の再建に努めている。

最高責任者の大師は専ら仏教会全般に就いて、全身全霊を打ち込んでおられる。特に後継者の養成を急務と考えておられるようで、菩薩頂の北側に仏教大学を建設し、この普化寺には小規模ながら、僧侶の養成所を創建する計画を述べていた。

この世に遺す最高の奉仕は、常々私も立派な後継者の育成だと考えていたが、個人を度外視して世界を見つめている大師には、感服するばかりであつた。

普化寺も例に漏れず、文革によつて廃虚と化し、１９８１年に復興の計画が漸く現実化して、どうにか今日の姿にまで漕ぎ着けたという。其の為に大師の貯えた金額が７万元ということだが、並大抵の事ではなかつたと思う。

大師の率先・献身的仏教活動に感激した山西省長は、老体を労るために日産自動車２台を寄贈したのである。未だ宗教を重要視していない当局の処置からして、大師の存在の偉大さを窺い知ることが出来るのである。

それにしても、文革に憤りを覚えるのは中国人のみではない。革命とは天命によつて革めることで、破壊が革命ではない。彼等がいう開放とは、武力によつて占拠することに過ぎないのである。

大師は２０歳の時に大同の善化寺（先日参拝ずみ）に修業に入り、今日まで５０年間の永きにわたつて仏門に帰依されている。大師の一本の顔の皺も修業の賜で、自ずから尊さが肌に伝わるような感じがした。

「禅」に就いても若干述べられた。中国の禅は日本の禅と稍々異なるようで、念仏を唱えながら静かに座禅を組むと説明した。南無阿弥陀仏と弥陀の名を唱え、あわせて其の功徳をたたえる「五会念仏」であろう。この五会念仏は唐の時代に日本に伝わつている。

禅とは即ち冥想に始まり、真実の理を得るための修業である。禅は古来インドに源を発し、中国に渡って宗派をつくつた。しかし其の教えが深められたのは、中国でなく日本であつた。それは中国内に繰り返された仏教弾圧と破壊の歴史が、成熟を阻んだのではなかろうか。

約３０分程度の説明の後、質問が許された。私は文革時に如何に過ごされたかと尋ねたのである。

大師は若い時から医術も学び、少林寺拳法を修得し、気合術から指圧術等を身に付けていた。其の結果、文革時においても弾圧に耐えられたそうで、この時に貯えた金が、寺院再建の元手となっている。流石に大師は昔の高僧のように仏法のみならず、衆生救済のために凡ることを修業されたのであつた。

竜谷大学名誉教授で中国仏教史専門の小川先生は、寺の布教活動と維持に就いて質問した。

中国では日本のような檀家を通した布教組織はなく、積極的な布教活動はしておら

ないが、来る者は拒まないというのである。日本と反対に信者の積極性に依頼しているから、そこに僧侶の修業が問題となるのではないか。勿論、日本のように僧が葬儀に行くことも稀だという。戦中に私も葬儀で僧の姿を見た記憶はない。但し中国の僧には何階級もあり、たまには最下級の僧が葬式を行うことはあるかも知れない。

寺の経費に就いては、参詣する僧侶や信者のための宿泊施設・１５０床（４人１室の簡易宿泊所）があり、これや売店の収益及び布施で賄つていると云う。

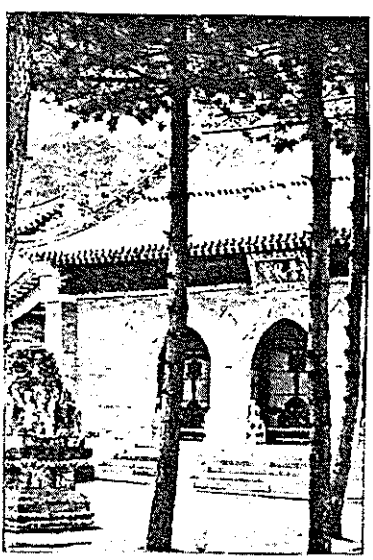
午前３時半に拍子木の音で起床し、僧侶の日課は座禅の行から始まる。その後、寺院内外の掃除を終えてから朝食をとり、午前中は村の労働に出て復興資金を捻出する。夕刻の７・３０から９・００までは托鉢に出掛けるという。

五台山としての法要や釈迦の生誕・涅槃の日には大法要を営み、大いに賑わうと述べられて説明が終了したのである。

大師は早速我々を座禅堂にに案内して、自ら範を示して座禅を組み、一行もこれに見習つたものの、足が痛くて儘ならずである。苛酷な弾圧に抗した大師の座禅は、天変地変があろうとも動じない姿であった。（上の写真は大師と共に）

五台山に最も古く興った仏法は華厳宗で、次いで浄土宗、律宗とつづくが、禅宗が栄えたのは唐の時代以降のことである。しかし、禅宗が栄えた時期が最も長く、明・清以降も寺院は増えつづけ、臨済宗や曹洞宗を形成していつた。そして文革後、禅宗最高の行である座禅を復活したのは、この蔵明大師であつたのである。

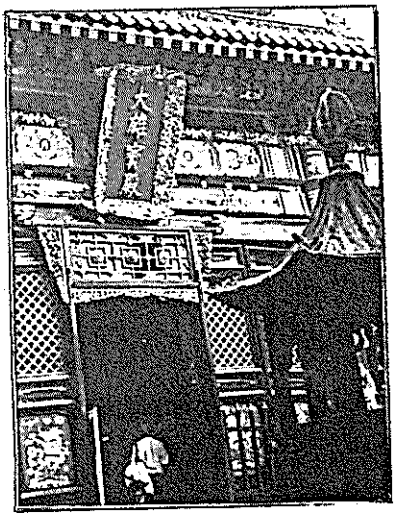
続いて寺院の参観に移った。此の寺は五台山でも最も古い大孚霊鷲寺の後身といわれ、玉皇廟の廃虚の上に１９２２年から１９３４年にかけて重建されたもので、天王殿、大雄宝殿、三大士殿、玉皇閣、禅堂、呂祖閣などが建っていた。



大雄宝殿の中央に釈迦像、右に薬師像、左に阿弥陀像の塑像が祀られ、両側に１６羅漢像が並んでいた。由来は判らないが珍しいことに、殿内の空中に西光住職の像が南面して吊るされていた。殿宇の四周も釈迦の一代記を描いた壁画で埋まり、修業道場らしさが漂っていた。

五台山随一の大師に接したことは得難い光栄であり、「心頭を滅すれば火もまた涼し」の言葉を、大師を通じて理解した感がした。私も今まで通り運命の儘に生きて行こう。大きな変化の波に揺られながら、くよくよせず、恐れもせずに、凡て自然の変化に従うだけである。（右は普化寺の山門）

南山寺



普化寺の南に聳える峰に建っているのが南山寺（別名は極楽寺）である。再び清水河を渡って山脚に着くと、僅かな露店と数頭の馬が客を待っている。私は躊躇せずに馬に跨つて急坂を闊歩して登った。

石坊（石の門）を通ると大石碑に「仏国善地」と彫まれ、第２の石坊に「命由天神」の掲額があつた。命は神の力によつて生かされている意味であろうか。其処で下馬したものの、此処から１０８の煩悩の石段を登攀しなければならず、稍々気後れ気味であつた。

段上には豪華な石造りの大山門が紺碧の空に聳え、「性空門」の額をのせていた。空門とは仏門に入り出家することで、生れ付き人間は仏法を信じなければならないと云うのである。

石積みの塀に囲まれた境内には七堂伽藍が整然と建ち並び、美観壮麗な中殿の上に「皆大懽喜」の金文字が光っている。１０８の煩悩の階段を踏破した参詣者の喜びを表現しているのである。

雲一つなく澄み渡る中に、色彩鮮やかな大雄宝殿が引き立つていた。元代建築の粋を尽くした宝殿には釈迦の塑像の外に、文殊菩薩像など数多くの仏像が鎮座している。殿宇の中の母子観音像と天女の像は、五台山のうちで最も素晴らしい彫刻で、華麗な衣帯と花盆を手にした天女は、魅力が溢れていた。（上の写真は大雄宝殿）

殿宇の両側にある１８羅漢の中の睡り羅漢は、其の眠る姿が泰然自若として面白い。殿内の光緒帝ご親筆にかかる「真如自在」は、仏法の本体、絶対の真理であろうか。白い舎利仏塔に拝礼して佑国寺へと進んで行った。

佑国寺

更に高い佑国寺に通じる細い山道の石段を登り、円形の門を入ると「布袋さん」が一体、広い楼閣の中にぽつんと祀られ、微笑を浮かべてご苦労様と慰めていた。

更に一段と高い処に大雄宝殿が建っていたが、参詣者は無いとみえて鍵が掛けられて、中に入れない。

南山寺配下のような此の寺は、元の成宗元年、時の皇太后が山中に仏寺を建立し、佑国寺と名付けたという由緒ある寺である。

七福神の一つである布袋は。梁朝時代の僧で号は長汀子という人らしい。体が肥えて腹は便々と肥満し、杖を持って布袋を背負ったように描く日本と異なり、中国では笑みを含んだ肥満体の像だけだという。そして布袋さんは弥勒菩薩の化身だとも伝えられており、外見の如何に拘らず有難い仏さんには違いない。

佑国寺の境内に立つて台懐鎮を望遠すると、近くに観音洞あり、遠くの山頂には殊像寺の微影が見え、周囲の峰は羽翼を広げて、我れ吾れをわすれるような景観だ。

文化大革命から立ち上がり、漸く平和な曙光が現われた台懐鎮、いよいよ明日は去らなければならない。この素晴らしい眺望が古来からの自然の姿である。山鳥の美しい鳴き声が我々を歓送していたのであつた。

6月1日（水）晴

五台山～太原（五台山～太原間の地図は２５頁）

遽々然として胡蝶の夢を見たような五台山、普化寺の蔵明大師に接したあの感激、多くの名残を惜しんで台懐鎮を去る時が来た。山の木は人間の役に立つからこそ切り倒され、燈火は明るいからこそ火を付けられるが、人間は鳥の目の廻る此の世を如何に過せばよいのか。疑問は更に疑問を生んでくるが、これが人生なのであろう。

小さな雑草だけが阡々と生えた山は木が少なく、旭日が照らす清涼山を見納めだと振り返り、文殊の里に通じる街道を快走して行った。

金閣寺

車中で遠い戦中のことを思い浮かべていた。八路軍総司令であつた朱徳は、この五台山を根拠地にして抵抗を続けた。宗教を否定した彼等は聖地を利用し、天下を制覇して文革の嵐は五台の聖地を吹き荒した。

国家や世界が複雑になればなるほど、戦争は世界歴史が終わるまで、継続するのであろうか。世の中は矛盾ばかのだと嘆くばかりだ。

バスは道路の右に寄り、清涼古刹と掲げた山門の前で停車した。この金閣寺は台懐鎮西方約１５㎞、海抜１９００ｍの山腹にあり、南台の西北に位置している。

唐の貞観元年（６２７）の建立で、屋根瓦が金メッキの銅瓦で葺かれており、晴天の日には太陽の日差しを受けて、黄金の光はまばゆいばかりに放つていたという。

１０８の石段は色彩艶やかな山門から山腹をのぼり、微か向こうに寺楼が見えていた。寺内の千手観音は高さ１７・７ｍもあつて五台山中で最も高いという。

奈良興福寺の僧・霊仙三蔵は三蔵の称号を賜り、仏法を究めた高僧でありながら、奥義を究めんとする者は、寺院に溶け込んで修業を積まねばならないと、金閣寺に２年間滞在している。のちに延暦寺第３代座主になつた円仁大師も此の寺を巡礼されている。

明朝時代には密教布教の道場となり、現在の建物は明・清時代のものである。残念ながら拝観する時間もなく、写真撮影だけで立ち去つた。

仏光寺

台懐鎮から約２時間、五台の山並みは千変万化して下界に下り、暑さは一段と増してきた。車は右折して小高い丘へと進み、松林に囲まれた境内の前で停車した。

敦煌の壁画にも描かれている仏光寺は、五台県城の東北３２㎞、豆村鎮の仏光山々腹にあり、北魏の孝文帝（在位４７１～４９９）の頃に建立されたが、法難にあつて破壊された。

唐の大中１１年（８５７）に再建し、その名声は都の長安から敦煌、或は日本にまで及んでいた。建築様式は奈良の唐招提寺とほぼ同じである。

大雄宝殿に安置された多くの仏像は１１００年の歴史をもち、無傷のまま保存されているのは他に類を見ない。正面中央に釈迦像、左に阿弥陀像・文殊像、右に弥勒像・

普賢像が安置され、その他を含めて３５体の塑象は唐代の作で、ふくよかな顔、湾曲した眉、整った唇が其の特徴をしめしている。（右の写真）

両側にある２９６体の羅漢像もまた、所せましと並び、高い名声を窺い知ることができるのであつた。

文殊殿は金の天会１５年（１１３７）に創建し、元時代に修復した建物で、殿内の塑象は人生を模写したように人間に接触し、壁画も明代に修理された芸術品である。

大雄宝殿の南側に建っている祖師塔は、２層６角の印度様式で、建立は北魏或は北斎時代である。塔内に敦煌の壁画を模写し、中国印度の交流の一つの証でもあるようだ。

仏光寺の参観で五台山の巡拝は終わりを告げた。多くの名刹古蹟に足跡を印したことは至上の喜びである。世尊の五台の聖地にくみされんことを祈るばかりだ。日本のような山紫水明・峨々たる山容ではないものの、聖境らしい連峰や、黄瓦・碧瓦・朱柱の仏閣は私の脳中に刻まれ、生涯忘却することはない。

太原へ

仏光寺を過ぎてから一面は黍畑に変化し、旧態依然とした農作業風景が展開していた。隣席の松田先生は戦場画家時代を回顧するように、盛んにスケッチに精を出し、私は一日千丈の勢いで進撃した山西南部の戦闘を想起していた。

午後１時頃、太原北方の交通の要衝「忻州」に到着して、秀楼酒家（飯店の名称）で昼食をとる。忻州は漢末から曹・魏ころは新興郡、北魏時代は秀容郡、隋代に忻州となり、金以降は専ら忻州と称していた。

農産物の外、鉄、石炭、塩、羽毛、解玉石等の産物があり、日中戦争当初の太原攻略戦では、激戦が展開した事でも有名である。

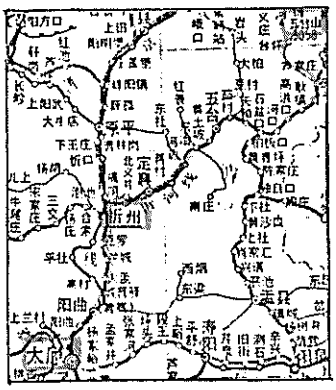
忻州附近からは黄土層の大平原が拡がり、村落の数も目立って多くなつてきた。古代の晋・魏の繁栄の原因も首肯かれ、蒋介石から延安に追い詰められた共産軍が、物資調達の目標を此処に指向したのも判るようだ。

午後３時過ぎころ人口２４０万の太原市街に近ずくと、従業員５万という大製鉄工場が見えていた。開放路と名付けられた郊外は小さな個人商店が軒を並べ、アカシアの街路樹は蜿蜒として続き、メンストリートは人の洪水で埋り、省都らしい賑わいを呈していた。

五台山では花盛りであつたライラックは既に実を付け、太原盆地は予想に反して真夏の気温である。佐川急便の看板を付けたトラックが見えていた。佐川は看板を抹殺しないことを条件に、中古車を無償で払い下げしているという。実に遠大な計画で、日中友好のためにも貢献するところ大である。

太原市・中心部の繁華街に聳える「并州飯店」に２泊することになつたものの、生憎の断水は終戦後へ逆戻りの状態だ。太原の古名の并州だけは気に入つた名称であり、太原の印象は差引零というとろである。

山西省の概要（右は五台～太原の地図）



黄河が内蒙古のフホホトの西南で大きく流れを変えて南下し、西安東方の三門峡で再び東へ曲がる。そのＬ字形の東が山西省で、中国一の石炭の宝庫と謂われる。

大同は前記したように北魏の都であり、太原は唐の建国ゆかりの北都である。その歴史が語るように、雲崗を始めとする数多くの名刹が伽藍を競っている。

本省の別名を晋省または山左と称している。晋省は昔、晋の地であつたからで、山左または山西というのは本省の大部分が、大行山脈の西方に位置しているからで、或は恒山の西にあるからだという説もあるようだ。

北は内蒙古に接し、西は黄河をはさんでオルドス及び陝西省に隣して、南は河南省、東は河北省に至り、首都の太原は汾河流域にあって略々省の中央に位置している。

南部の一部を除き山地が多く、気候は大陸性で酷暑酷寒の厳しい風土である。しかし、四季を通じてモンゴル高原から飛来する黄土が天然の肥料となり、昔から農業が開け、戦国時代には趙・韓・魏などの諸国が建国して、覇を争った地でもある。

太原の概要

山西省の中央部、海抜１４００ｍの肥沃な太原盆地の北端に位置し、年間平均温度は９・２°、最高は３２°、最低は－２５°、年間降雨量は９５０㎜ である。

汾河の東岸に面する交通の要衝で人口２４０万の省都である。汾河西岸には鉄鋼、化学などの工場群がひしめき、落ち着いた雰囲気の中に古寺、古廟があり、古都の歴史を感じさせる。

古くは晋陽と呼ばれ、春秋時代の晋の都城である。戦国時代は晋は三国に分裂して趙が太原に都していた（後に邯鄲に移る）。古来、北敵が平原に侵入する門口で、軍事的要衝であり、諸王朝興亡のキー・ストーンであつた。

秦の時に太原郡となり、漢代に韓国、代国、太原国、太原郡等と改められた。漢以降は幾度も変遷して唐の高祖はここで独立の旗を挙げ、五代北漢には国都となり、宋は此処を陥落させるのに二代の皇帝が大軍を向けている。

明末には李自成（１６０６～４５、大流賊団の首領となり、北京に侵入して明朝を倒したが、清に敗れて自殺した）は一時ここに立て籠もっていた。この明・清時代は太原府と称して本省の首府であつた。

旧晋城は宋代９７９年に灰燼に帰し、附近の農村に新たに築いたのが現在の太原の位置である（開放後は城壁は取り壊す）。交易地としては宋代以降も衰えていない。

太原が大いに発展するようになつたのは、閻錫山がここに駐屯するようになつてからだ。所謂、山西モンロー主義を唱え、鋭意、省内産業の振興に努めたからである。

彼は山西に鎮座すること１８年、一時は中国の模範省として経済建設に成功したが、１９３０年、馮玉祥にかつがれて反蔣戦争に出馬し、一敗地にまみれてからは、山西モンロー主義も頓挫の形となつた。

次いで１９３６年、中央軍の山西侵入と共に蔣介石に屈服し、抗日戦に巻き込まれたのは、記憶に新しいことである。

中国の州・県について

中国の歴史を読むと、同じ所を県とか州と呼んでいるが、これは中国の地方行政区画の歴史をみなければならない。

中国では昔、人が集まって生活する所を凡て「邑」と言った。田舎の小さな部落も邑であり、大都市も邑であつた。

秦・漢以後、邑のすこし大きいものを「県」と云い、県令をおいて統治させた。幾つかの県をまとめて「郡」と云い、郡守をおいて監督させた。県は基礎的な地方行政区画の重要な単位として、今日におよんでいる。

その後、唐・宋のころになつて「郡」に当るものは「府」または「州」と云われた。明になつて「州」の大きいものは従来どおり「府」と呼ばれたが、小さいものは格下げとなつて「県」と同格になり、「府」に隷属することになつた。即ち「県」は二種類に分かれ、「県」そのものと「州」から転落した「県」とになつた。

中華民国になつてからは府制を廃止し、一律に省の下に県がおかれた。開放後は市の下にも幾つかの県が置かれている。

昔の地名としては、００県でも、００州でも、どちらでも意味は通じる訳である。

城壁の由来

中国で城壁をめぐらしたのは非常に古く、紀元前の春秋・戦国時代からであつた。これは匪賊や外国の軍隊を防ぐためで、秦の始皇帝が六国を滅ぼそうとした時、六国側は大小かずかずの城を築いて、これを防いだ。

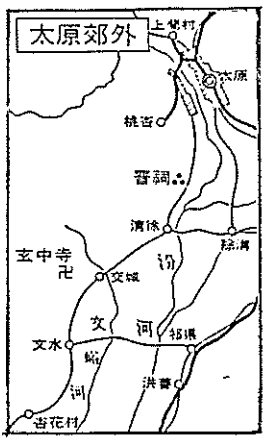
続いて漢の高祖もまた天下の県・邑に命じて城を築かせ、唐・宋もこれに習い、幾度かの攻防戦で屡々こわされたが、次ぎの時代には城は修復された。

凡ての州や県に城があつた訳ではない。府や州には大抵あつたようだが、県になると、ない所もかなりあつたようである。県までが城壁を造るようになつたのは、明・清の時代である。

我々が戦中に見た城にしても、その程度の差は非常に大きい。「城」といふ字は「土」が「成」ったもので、県城以下の部落では殆ど堤防で村を囲んだものであつた。

大きな町の城には幾つかの門が設けられ、宋以後には城門の外側に更に半円形の月城が設けられた。そして門は正面に設けず、食い違うようにやや側面につくり、敵の侵入を防ぐのに都合のいいように設計されていた。然し乍ら、開放後の中国では城壁は殆ど取り払い、ナポレオンが云った眠れる獅子の面影を見ることはできない。私の見たところでは古都西安だけである。（下の写真は太原の中心街と并州飯店）

6月2日（木）晴　太原観光



浄土宗の源流・玄中寺の由来

今次旅行の望外の幸せは玄中寺を訪れたことである。私も浄土真宗の一門徒として後塵を拝する身だが、浄土宗の祖庭（庭とは場所の意）が玄中寺であることを知ったのは、先のＮＨＫの報道特集であつた。

一行の小川・前川両先生から連日ご高説を拝聴し、それを纏めて一項を設けることも意義がある。勿論専門知識のない私のことだから正鵠を得ず、誤謬のあることは承知している。

浄土真宗には七高僧と云われる大師や上人がおられたが、その中の第３番目の曇鸞大師（４７６～５４２）、第４番目の道綽禅師（５６２～６４５）、第５番目の善導大師（６１３～６８１）の三祖を祀る旧蹟が、この玄中寺である。（上は玄中寺の位置図）

［第１番目はインドの龍樹（１５０～２５０ころ）、第２番目はインドの天親（３３０～４００ころ）、第６番目は日本の源信（９４２～１０１７）、第７番目は同じく源空（法然、１１３３～１２１２）］

この石壁山・玄中寺は太原の南西約６０㎞の交城県から、さらに北西へ約１０㎞行った石壁山中にあり、海抜９００ｍの折り重なつた連山の山間に位置している。

北魏の高僧・曇鸞が創建して浄土の教義を説き、隋末の道綽及び初唐の善導によつて受け継がれた。日本の法然上人はこれに学び、善導の思想に基ずいて日本の浄土宗を開いた。そして法然の弟子である親鸞は浄土真宗を確立したのである。

宗徒は曇鸞・道綽・善導を中国浄土宗の三祖と仰ぎ、玄中寺を祖庭と呼んでいる。その変遷は北魏の浄土宗から、元代に禅宗、そして清代に再び浄土宗に戻ったと伝えられている。以下、中国の三祖から日本浄土宗に就いて記述する。

［曇鸞大師］

大師は山西の雁門関の生まれで家は五台山に近く、仏門に志を立て、生涯をかけて「大集経」の研究を決意されたが、途中、気疾という病気にかかり、その研究も頓挫してしまつた。

このため大師は、先ず我身の健康を快復しようと中国及びインドの医学をきわめて、遂に二千年の中国仏教史の上で、上代唯一の医僧となられたのである。自らの体験を幾つかの医書に著して人々の病苦を救おうとされた。

五十歳を過ぎた大師は、インドの龍樹（菩薩）教学の権威者であつたが、更に仏学の研究を大成する為には、長生きをしなければならない事に気付いた。

当時南朝の梁国に不老長寿の教えを説く、陶弘景という仙人の名を聞き、訪れようと山西から北魏の都・洛陽を経て、揚子江を渡つて梁国に入ったが、当時の梁は北魏と紛争中であつたため、スパイとして捕らわれて武帝自らの取り調べとなつた。

奉仏の天子武帝が仏性の義に就いて質問したところ、大師は一部始終これに答えたため容疑は晴れた。帝は感銘のあまり、翌日も引き続いて仏法の討議となつた。

このとき帝は、何のために我が国へ来たのかと尋ね、大師は陶弘景を訪れる経緯を

語られた。当時武帝は、道教界の大立者の陶弘景と旧知の間柄だつたから、直ちに勅命を下した。これによつて大師は陶弘景を訪ねることが出来た。このとき不老長寿の教えとして、仙経十巻を授けられたのである。

曇鸞大師は梁の国に別れを告げ、帰路北魏の首都・洛陽に立ち寄つた。当時この都には、永寧寺という国立の大寺があつた。其処ではインドのガンダーラから来た菩提流支三蔵が、沢山の大乗経論の翻訳にあたっていた。

大師はこの菩提流支を訪ねて、仏教に不老長寿を説く経典はあるかと、其の教えを乞うた。そのとき菩提流支は、大地に唾を吐いて「釈尊の教えを学ぶ者が、不老長寿どころか無量寿の教えがあることを知らぬとは」と、「観無量寿経」を提示された。

大師は自分が仏教徒でありながら、外道の教えになびいた事を恥じ、仙経十巻を焼き捨てて、観経の教えを奉じる人になつた。

この曇鸞大師と菩提流支との出会いは、二千五百年の仏教史上に重大な意味をもたらした。これが機縁となつて、その翌年、菩提流支はガンダーラから持ってきた梵本、天親菩薩の無量寿経論即ち「浄土論」一巻を漢訳して、これを曇鸞大師のもとに贈呈することになつた。これによつて大師は、「浄土論註」二巻の製作となるのである。

この「論註」とは、どういう聖教であろうか。元来、曇鸞大師は龍樹菩薩教学の権威者であつたが、此の人が新しく、菩提流支が訳した天親菩薩の無量寿経論を、龍樹教学の心をもつて註釈したものが、「浄土論註」二巻である。

「浄土論註」は、龍樹菩薩の精神を承けた曇鸞大師が、天親菩薩の「世尊我一心帰命尽十方無碍光如来」の「浄土論」に註釈を加えることによつて、新しい中国仏教学の指導理念が確立した訳である。

大師は、これを自分だけの喜びとせず、大いに世の人々にまで広めたので、北魏の并州の地から浄土信仰が勃興したのである。

大師が石壁山・玄中寺に居られたのは、南朝の梁から帰り、後魏の孝静帝の帰依をうけて、并州の大寺に勅住された後である。菩提流支三蔵から「浄土論」を受け取られた大師は、此の閑静な玄中寺に住み、ここで「浄土論註」二巻の製作に没頭されたことであろう。

近くの鸞公巌で、道俗のために教化活動をされたから、この玄中寺こそは、中国浄土教学の発祥の地である。

東魏の興和四年（５４２）、大師は疾病によつて平遥の山寺で亡くなり、享年６８歳であつた。大師の臨終が東魏・皇帝の上聞に達し、勅命によつて玄中寺に近い文水のほとりの文谷に葬り、曇鸞大師の生涯の事績を記した碑を建て、偉大な功績をたたえたのである。

［道綽禅師］

曇鸞大師滅後二十年目に、道綽禅師は玄中寺に近い并州文水の地で生まれ、十四歳で出家してから常に玄中寺に居住した。

或る日、玄中寺の曇鸞大師の碑文を読んで初めて其の偉業を知った。それからは遺書である「浄土論註」や「讃阿弥陀仏偈」などの探究に精魂を込めたのである。そして浄土信仰の理論と実践教化に専念することになつた。ときに、隋の大業五年（６０９）禅師４９歳の時であった。

その後二百回にわたつて「観無量寿経」を講義されたが、その研究の完成をみない

うちに貞観十九年（６４５）、八十四歳で往生された。弟子たちが講義のメモやノートを纏め、「安楽集」二巻として世に伝えたのである。

道綽禅師の大きな業績は、インドから伝えられた浄土の教法を、時機相応の念仏としたことである。釈尊の入滅から既に一千五百年を過ぎた末法の時代に、凡夫往生の道として之を広めた点である。

毎年秋になると周辺の山々に落ちる木の実を拾い集めて、これで数珠を作り、これを念仏の道具としたのであつた。

一般大衆の日常生活から遥か遠く高いところにあつた仏教、中でも浄土の教えを末法の時代の人々に、唯念仏より外に、凡ての人達が幸せになる道はないとないと、説かれたのである。禅師が時機相応の専修念仏に確信を持たれたからである。

禅師の教化は并州の晋陽・太原・文水の三県の道俗に及び、七歳以上の者はみな念仏を唱えたと云われている。

道綽禅師の徳望は、唐の王室の上聞にまで達した。唐代きっての聖天子であつた太宗皇帝は、唐朝建国の故地である北京（并州）の地に屡々行幸したが、その一日玄中寺を訪ねた。そして文徳皇后の病気の平癒を願う供養が行われている。

此のことは碑文に書かれていると云う。このように唐王室の外護によつて、玄中寺の道綽禅師の人望は、一層高まったのであつた。

［善導大師］

唐の貞観年間、善導大師は石壁山・玄中寺に来られて道綽禅師から念仏の教えを受け継がれた。

大師は七世紀の始め、山東省の臨淄で生まれ、姓は朱である。各地を遍歴修業して貞観十年（６３６）ころ、道綽禅師の徳を慕って玄中寺を訪ね、専修念仏の教えを学び、片田舎で起った念仏の教えを、長安に出て弘めたのであつた。

曇鸞・道綽・善導の浄土三祖は、それぞれの時代に、それぞれの役目を分担して念仏の教えを世に広めた。曇鸞の教学と道綽の実践、それを善導大師は世界的な長安の都に弘めたのである。

初めは長安の郊外の悟真寺に住みながら都にまで布教に出掛け、伝導の相手は市民道俗であつた。それが長安の市民の喜びだけでなく、遣唐使や留学僧の来る日本・朝鮮などにまで伝わり、念仏の教えが世界的に弘まる機会となつた。

善導大師の徳は長安の市民だけでなく、唐王室の高宗皇帝や則天武后の側近にまで聞こえる程であつた。大師は永隆二年（６８１）、六十九歳で長安の実際寺で往生されたのである。

曇鸞・道綽・善導の三祖の念仏の教えが日本に伝えられたのは、既に奈良時代で、遣唐使の往来や、留学僧の帰朝によるものである。

［親鸞聖人］

このようにして我国の奈良時代には、西方浄土の念仏の種が蒔かれていたが、直ぐ発芽せず、皇室初め上層部の一部の人達だけの信仰であつた。それが大衆化したのは平安朝に入ってからである。「源信」の出世と、我国にも末法時代の到来という風潮が起り、時機相応の法門が要望されてからである。

やがて鎌倉時代となつて比叡山の黒谷から東山吉水に、偏依善導を標傍する法然上人「源空」の念仏がおこり、これを親鸞聖人が受けとられたのである。

偶々、念仏停止の承元の法難にあわれ、師弟ともども流罪の身なつた時、越後の配所で聖人は浄土諸師の教えを学び、そこから念仏の教えの源流を求めたのである。それは北魏の玄中寺の曇鸞大師であり、其の源はインドの二菩薩、とくに天親菩薩であつた。この天親と曇鸞の上に浄土の精神を発見したのが親鸞であつた。

越後国府での配所の生活五年のあと、赦免されてから以後、自分の喜びを辺地の北越の人々に、さらに関東平野を開拓する農民の村里へと、念仏の喜びを広げようとした。これが浄土真宗の出発点となつている。

あれこれと記述したが、浄土真宗の源流となる根本的な問題を生み出した所が、石壁山・玄中寺であり、三祖の聖地である。

石壁山・玄中寺詣で

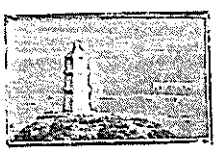
中国に「盛世危言」という言葉がある。「栄える世の正しい言葉」の意味で、今朝はこの言葉に蝕れたい心境でホテルを発つた。

岡山県に匹敵する太原市も３０分も過ぎると、田植期を迎えた水田が拡がっていた。小江南の名が付けられているという。突然、数kmにも亘る自転車の大軍に遭遇して、車は遅々として進まない。

通訳の楊さんは釈迦の誕生日を祝って群衆が集り、そのために混雑していると説明していた。釈迦の生誕日とは、我々の玄中寺詣では吉日をえらんだようだ。

しかし、行けども自転車の波は蜿蜒とつづき、渋滞している自動車は列をなして身動きも出来ない。四方八方から雲霞のように押し寄せの光景は戦場だ。

禿山が私の網膜に写ったところでバスは右折し、山勢が相迫った小さな渓谷に入って行った。停車した崖淵から、白い塔が空に透かして見えていた。石壁山・玄中寺のシンボルである宋代の８角塔であつた。（２７頁地図参照）



渓谷にかかった玄津橋の手前で下車した。見上げる峰々は累々として天然の城塞のようで、山峡の明美は一段と欽慕の心を高揚させていた。（右の写真はシンボルの白塔）

山紫水明の静かな峡谷を眺めて急坂の参道を登り、漸く遠い祖庭に辿り着いた感激を味わった。玄中寺は石壁の名が示す通り、岩山の絶壁に囲まれ、海抜９００ｍの山腹に整然と伽藍が建ち並んでいる。

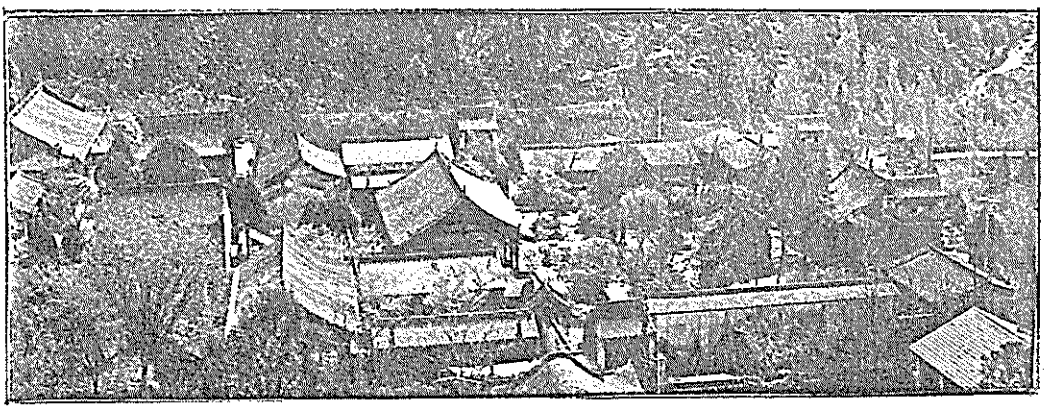
山門に掲げた「永寧禅寺」は修業の意味を表わし、深山幽谷の環境は聖地に相応しい風致を備えて、寂として人なきが如しの気が立ち籠めていた。

大師は我々を青眼を開いて歓迎して、本堂の大雄宝殿に案内した。

阿弥陀如来の立像が本尊で（次頁の写真）、前立して小鉄仏座増が安置されているほか、殿の壁面には１６羅漢像が掛けられている。玄中寺の僧は此の宝殿で毎朝６時と毎夕７時に勤行を行い、三祖の霊に捧げているのである。

一行中の僧籍をもつた３人は直ちにお経を上げた。他の人達も郷愁愛着の念をもち、直立不動、心の中で唱和した。信仰は人生の力である。信仰のあるところに神仏があるという、忘我陶酔の一時であつた。（阿弥陀像の左右の手は日本と異なるらしい）

今日の日を自分自身のものと思つた時は、本当に幸福である。



大雄宝殿には「雪峰蓮相」「南無阿弥陀仏」の額が掲げられ、名を竹帛に垂れた方外の人を祀るのに相応しい、古色蒼然とした殿堂である。写真撮影禁止にも拘らず、大師の特別な計いで許され、各々大師と並んで撮影の光栄に浴したのであつた。

大雄宝殿の奥は「西方聖境」と掲額した七仏殿が建ち、それぞれ印相の違った７体の仏像が鎮座している。

七堂伽藍の最上段にある千仏閣には、本尊の釈迦如来の立像を中心にして、２３０体余の鉄製の坐仏像が安置されている。しかし、現在は修理中で参観は許されなかった。その他この玄中寺には６００体余の仏像が祀られており、浄土宗の祖庭らしい気が満ち満ちていた。（上は全景。右は本尊の阿弥陀如来像）

千仏閣の台上から眺める石壁山は、緑の木立の濃い陰の中に岩壁が顔を出し、峰は翼を延ばして重畳として、我が心の安住の里と思わせていた。千仏閣を去るにあたつて、欠けた古い瓦一つにしても、悠久の歴史が受け継がれている思い、一片を拾って参拝の想い出とした。

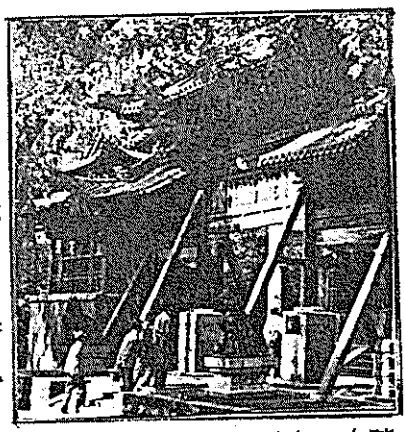
続いて歴代の記碑のある碑廊を廻り、墓地の高台に案内されて玄中寺全景の写真を撮つた。山のうねりの中に厳かに建つ玄中寺、我が網膜に刻み込まれた伽藍の光景は、満腔の感動を与えて去り難しの心境であつた。

碧瓦と朱塗りの寺院を眺めて感歎を胸宇に抱きながら、疲れた脚を引きずって八角塔に登つた。輾転反側して待っていた我々は東峰の頂に立ち、名残りを惜しんで祖庭に別れの眼を向けていた。

峰々の彼方此方に早咲きの萩の花が咲いている。玄中寺の別名をナツメ寺と云うように、周囲はナツメの木が生い茂り、聖地の景観は趣に溢れていたのである。

親鸞聖人の唱えた弥陀の本願は、「老少善悪の人を選ばず、ただ信心を要すとしるべし」と教えられたが、玄中寺に詣でて私ながらに肝に銘じたのであつた。

晋祠（位置は２７頁参照）



人間は始終、行く場所の色を帯びると云われているが、玄中寺を離れても未だ色はさめないようだ。交城県招待所で昼食をすませて、晋の祖を祀る晋祠に向かった。

晋祠は太原市の西南２５㎞の晋祠鎮にあり、東は汾河の流れに臨み、西は呂梁山脈をひかえ、山麓に拡がる美しい園林は静かなたたずまいを見せていた。

晋祠の名は紀元前１１００年ごろ、殷王朝を滅ぼして建国した周の武王の次子で、晋の始祖となつた「唐叔虞」を祀つた所から来ている。晋祠は１５００年以上の歴史をもち、４世紀の後半の北魏（３８６～５３４）の時代から、歴代にわたって造営が続けられ、現在の境内には３００以上の古蹟が残っている。

碧瓦・朱塗りの豪壮な山門は金色の「晋祠」の額を掲げ、その後方の「三晋名泉」と書いた楼閣は古色蒼然 として構えていた。唐時代のもので昔は井戸があつた処だ。続いて、北宋時代の１０９７年に鋳造した鉄人の像、即ち「北鋳鉄人」が仁王立ちに睥睨し、次ぎに絢爛豪華な楼門が控えていた。

楼門に掲げた「対越」とは、皇帝が通ると云う意味で、中国の言葉は難問ばかりだ。皇帝が通る道を進んで行くと、古めかしい聖母殿が鎮座している。(上は対越の門)

祠内で最大最古の木造建築を誇る聖母殿は、高さは１９ｍで回廊をめぐらし、殿内も広々として荘重な感じがしている。特に木製の龍を巻き付けた柱は珍重だ。

聖母殿は唐叔虞の母で、周の功臣・大公望の娘といい伝える「邑姜」を祀つている。殿内中央の壇上に聖母の像が端座し、その両側に等身大の、さまざまなポーズをとつた女官ら、４２体の侍女像が並び、豊かな表情、姿態は傑作の名に恥じないものだ。

聖母殿の右側には、樹齢２千数百年という「周柏」の老樹があり、その前に見事な鐘楼が建っている。

聖母殿の左は「難老泉」の清水が流れ、これを李白は「晋祠の流水　碧玉の如く、百尺の清潭　翠娥を写す」と詠んでいる。流れの脇にある「晋陽第一泉」と書いた楼閣（康熙年間の作）を含め、境内には３ケ所の泉が湧き出ており、水温は常時１７°を保つて甘いらしい。(下は難老泉の流れ)

泉の奥には岩で護岸した湖が拡がり、湖水の向こうに聳える５層の塔（乾隆時代）は、影をさかさにして池の水に浮かんでいた。

日本から入唐した僧・空海も晋祠を訪れているが、古代から文人墨客が好んで遊んだ所である。現在も人々の憩いの場となつていた。

周の武王を始め当時は、皇后や妃に生ませた男子に、１国を与えて周朝の安泰を図った。しかし、それらの国は強国に発展して、本家の周の支配力が低下して、遂に分裂して行った。その歴史の遺産である（晋もその一国）。

崇善寺

太原市の中心部にある崇善寺は、唐代の白馬寺が起源だという古刹である。白馬寺の跡に明の太祖・洪武帝の第３子・晋王・朱棡が、１３８１年に母を弔うために再建した寺院が大拡張され、本堂を含む壮大な伽藍が建立された。この時に崇善寺と改称されている。

清の１８６４年の大火で大部分が焼失したが、本堂の大悲殿は焼失をまぬがれ、明代初期の姿で現存している。

「宗唐遺址」と掲げた山門を過ぎると、すぐ２層の大悲殿がある。「慈航晋渡」の掲額を始め、母を弔う意味の額が各所に見えていた。

殿宇内に祀られた本尊・千手十一面観音は、高さ８m、明代彫刻の傑作で、その両側に文殊菩薩と普賢菩薩が安置されている。（右は千手十一面観音）

殿内東西両側の古めかしい戸棚には、宋・元・明代の大蔵経３万巻が保存され、其の中には画で書き表わした経典から、西夏（１０３８～１２２７）の経典も含まれているという。

浄土宗である崇善寺は京都の智恩院（浄土宗本山）と同じく、鐘楼には重さ９９９９kgの大鐘が吊してあり、我々に寺の印象を残していた。

この地方はは春秋時代から栄えて、北方の雄であつた晋が支配し、その都を晋陽と呼んだ太原である。豊富な農産・鉱産等に恵まれた影響から、数多くの寺院楼閣が建てられたのであろう。この偉大な過去の歴史を持つ市街は一変して、今は稍々寂しい感じがしていたのであつた。

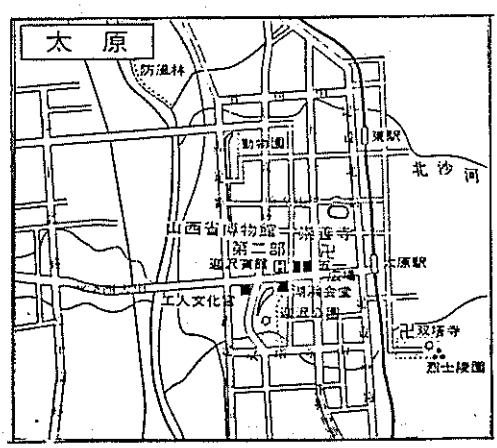
山西省博物館

本日の最後の観光は博物館であつた。市の中心部にあり、并州飯店前の公園の裏手になる。建物は唐代の道士「純陽子」の廟・「純陽廟」を利用したものだ。

広くない館内には、殷周時代の青銅器、漢代の画像や瓦、北斎時代の墳墓の出土品、南北朝から隋・唐にかけての石彫仏像などが陳列されていた。

閉門時間ぎりぎりの見学には説明もなく、駈足で通り過ぎた程度であつた。

近年の中国旅行では夜間の観賞が消え去ってしまった。以前は地方の劇や民族舞踊等の観賞があり、特に少数民族の催しに興味が持たれたが、稍々不満を感じる。夜は専らメモの整理に取組み、明日に備えて休息に専念するばかりであつた。（右は太原市内の略図）

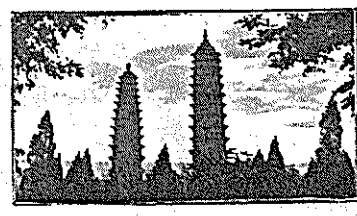


6月3日（金）晴

太原～済南

（右は太原～済南の地図）

双塔寺



中国旅行は先ず計画通りに進行することは少ない。昨夜、夜行寝台に乗車して済南に向かう予定が、本日の昼間の列車に乗車することに変更された。

８・３０に并州飯店を発つて双塔寺の見学となつた。明の万暦年間（１５７３～１６１９）、高僧の仏灯が勅命によつて建立した双塔寺は、太原のシンボルといわれる８角１３層の双塔で名高い。

蜿蜒とつづく大平野の中を走ること約３０分、瑠璃瓦の屋根が輝く寺楼の中に、高さ５４・７ｍの双塔が他を睥睨するように聳えていた。（上の写真は双塔）

永祚寺（これが本名、双塔寺は俗称）の石段を上がると一面に花畑が拡がり、その中を大雄宝殿へと進んだ。見上げる双塔は眼前を覆つて、明の将・李自成が「両座の塔、天をうがつ」と詠んだ形容の通りだ。

暫し天空を仰ぎながら味わう、「申々如たり」とのんびりした気分は、開封の鉄塔を想い出させた。彼の懐かしい鉄塔（実際は瑠璃瓦葺）は高さ５５ｍ、８角１３層だから、この双塔と全く同じであつた。

太原～石家荘の回顧

台湾同胞の中国各地の古里訪問を新聞は報道したが、事実であつた。太原国際旅行社にも台湾同胞接待所の看板が立ち、歴史は速度を早めていた。

１１・１０に太原駅を発車して済南（２１・３７着）への車中の人となつた。本数が少ないのか列車は超満員である。

石家荘までの石太線沿線は大行山脈が南北に走り、古代から幾多の激戦が展開され、日中戦争当初も死闘のあつた古戦場である。この地形を眺めて往時を回顧するのも楽しいことで、眼を皿にして凝視をつづけていた。

列車は寿陽を過ぎ、石家荘間での中間地点・陽泉に停車した。汾河上流の渓谷をはさんだ連山は鉄・石炭の埋蔵が多く、今世紀の初めごろから製鉄所を建設したが、陽泉は現在、大工業地に発展していた。

陽泉と町続きの平定は歴史が古く、宋の平定郡の地で、金・元・明時代は平定州と称し、清代に平定直隷州となつた重要な所である。この附近は大行山脈の山中で、東に娘子関や井陘の険があるように、頗る険粗な地勢である。

娘子関（１４・４３着、３分停車、上の地図参照）

石太線が大行山脈を横断する山西省の東端が娘子関で、中国三関の一つとして名高い難所である。標高１０００ｍを超す天下の険は、両側の峨々とした峰々は相い迫って、「一夫路に当れば万夫も進むこと能わず」という険隘な地形だ。

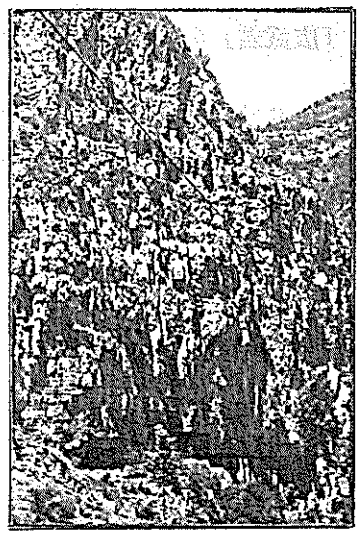
深山幽谷・奇岩怪石の並立している中を走る列車は危険極まりなく、山頂は羽翼を

延ばして尽きることを知らない地勢だ。

中国の歴史を繙いてみると、河北の石家荘方面から山西の太原に至る、長い隘路の咽喉を扼しているから、各時代の重要な争奪地点として注目されていた。

日中戦争当時、山西の軍閥・閻錫山は娘子関を難航不落と称していた。天険を利用して山腹に無数のトーチカを構築し、約１０万の兵力を集中した堅塁であつた。

後日に私の上司となつた鯉登大佐（当時）の指揮する連隊は。６０°の急斜面を攀じ登るような苦戦を強いられている。（右は鉄道沿線の地形）



朝に一高地を占領し、夕べに一渓谷を攻略するという辛酸をなめた戦闘は、甚大な犠牲が続出するばかりであつた。神出鬼没の敵に対して、権謀術数の限りを尽くし、雲霞のような衆敵を蹴散らした鯉登部隊の名声は、全軍に響きわたつたのであつた。

戦史を繙くと当時の娘子関の戦闘地区には、毛沢東に優る中共軍の将・朱徳の部隊も参加している。得意とした山岳ゲリラ戦を展開し、日本軍の進攻を執拗に阻止している。車窓から眺める地形はゲリラ戦に最適な地形であつた。

大行山脈の連綿と連なつている山岳は、黄土層の特徴として屹立した断崖をつくり、攻めるのには難く守のには易い地形であり、古来から娘子関の争奪戦は天下分け目の戦闘であつた。

大行山脈の険しさを詠んだ三国志の主人公・曹操は、娘子関を偲んで詩を作っている。最初の一端を記して山の峻険を想起してみたい。

「北、大行山に登る　難い哉、何ぞ巍巍たる　羊腸坂は詰屈して　車輪、之がために摧く・・・・・」

井陘（１５・２４着、６分停車、前頁地図参照）

娘子関を過ぎると山容は変わって、茫漠とした黄一色の麦畑が展開した。然し乍ら３０分も経過すると、再び大行山脈の流れが隘路を形成している。

河北省西端の井陘は、春秋戦国時代以来の著名な戦略要地であつた。即ち、井陘口の隘路が、険要の地として争奪の目標となつたのである。次に古代戦史の一例を書いて井陘の険を想起したい。

股くぐりで有名な韓信が、背水の陣を布いて趙軍を破ったとき（前２０４）のことである。

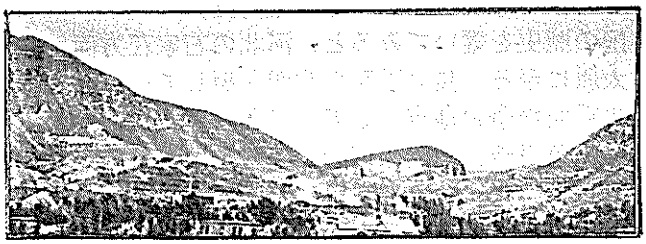
魏（山西）から趙（河北）に向かった韓信の悩みの種は、井陘の狭道であつた。どうしても通らねばならない隘路が余りにも狭いので、大部隊の通過は困難であつた。

隊列が延びて兵力が分散したところを趙軍に攻撃されると、韓信の知略でも防ぐ方策がなかつた。しかも趙には、「広武君」という優秀な軍略家がいた。彼が此の狭道に着眼しない筈がないからであつた。

事実「広武君」は、韓信の指揮する魏軍がこの狭道に差しかかった時に、一挙に攻撃して撃滅するようにと、主人の「成安君」に建言した。ところが、儒学を好み正義

の戦いを呼号していた「成安君」は、「広武君」の建言をきかなかつた。

無事に井陘の狭道を突破した韓信は、やすやすと趙軍を破ることが出来たのである。（右は隘路）



「敗軍の将は兵を語らず」という言葉は、これから記述する事柄から生まれたのである。（上の文章から続く）

この戦いにあたつて韓信は、「広武君」を殺さずに生け捕ることを全軍に命じた。戦いが終わって「広武君」が韓信の面前に引き出された時、韓信は厚く彼を礼遇して次ぎのように言った。

「これから北の燕（都は北京）を伐ち、東の斎（都は山東省の臨淄（リンシ））を討とうと思いますが、どうしたら成功するでせうか」と。

すると広武君は「敗軍の将は以て勇を言うべからず、亡国の大夫は以て存（国を保つ道）を図るべからず」と聞いております。「私は戦いに敗れて、あなたの捕虜になつている始末です。どうして大事をはかる資格があるでせうか」と答えたと云う。

この話は「史記」の「淮陰侯列伝」に書いてある。「敗軍の将は以て勇を言うべからず、亡国の大夫は以て存を図るべからず」から、「「敗軍の将は兵を語らず」が生まれたと伝えられている。

石家荘

大行山脈の天険を通過すると、大平野の中に活気に満ちた大都会が見えて来た。これが石家荘で、別名を石門という。

この地は春秋時代に石邑の名を残した古都で、戦国７雄の一国であつた趙の都でもあつた。鉄道の発達よつて政治・交通の要地・各種産物の集散地として栄え、特に山西の咽喉部に当る重要な所である。

私が河南省の任地に赴任した際、此処に宿泊した懐かしい所の一である。当時は灰のような黄土が舞い上がり、薄暗い不潔な町の印象が脳裏に刻まれている。その後も何回ともなく通過したが、夜行列車のために思い出を新たにする時がなく、今回漸く温故知新の機会を得た。実に嬉しいことでだ。

ホームに降りて見渡すと、乗降する中国人の群れは輻輳して足の踏み場もなく、数本の長い列車が停車して街の眺望はきかない。この雑踏する人の波は優に石家荘の隆盛を証明しているのであつた。

強烈な大陸の夕陽は、屋上に掲げた「石家荘」の看板だけを照らし、列車は済南へと駅を後にした。石家荘～済南間の鉄道は戦後に建設したもので、夕闇の迫るまで生地を見たいと眺めていた。（下は石家荘～済南間の地図）

済南

列車は鉄橋を通過し、暗い夜の帳の中に一条の流れが星の光に照らされていた。数々の苦しみを与えてくれた黄河の下流だ。

私と黄河の対決は約２年間にわたったが、何一つ楽しみも味わなかつた残虐物語であった。しかし回顧してみると人生に教訓を与え、懐かしいものがある。

待望久しい済南駅に定刻の２１・３７に到着した。戦中に幾度か滞在した古都に親しみを覚え、緑の並木が濃い陰をつくっていた森の都を思い出す。

ドイツが建てた済南駅は昔のままの姿で我々を迎え、明々としていた街は今は暗い。寂莫とした市街を通り、斉魯賓館で一夜を過ごすことになつた。山東省は春秋戦国時代の斉と魯の国で、それにちなんでだ名前は印象的で忘れない。

済南は現在の山東省の省都で人口は３７０万、東西３４㎞、南北２０㎞の地域を占め、５区４県からなつている。済南の名は今の黄河、即ち昔の済水の南岸にあつたから生まれたもので（漢代）、春秋戦国時代の斉の「濟邑（ジンユウ）」という町である。

その後は漢の済南郡、隋の斉郡、唐の済州、宋の済南府、元の済南路、明・清の済南府の主都であつた。

この地が果たして禹の「青州」であつたか否かは議論があるようだが、極めて古い都であつたことは間違いない。５０００年以前に此処に住んでいた人達は、「黒陶」と呼ばれる「竜山文化」を創造している。

昔から「済南７２泉」云われるように、市内には１００以上の泉が湧き出て、泉の都と呼ばれていたが、現在は２７泉だと説明していた。その泉の景観は私の脳細胞に明瞭に刻まれていた。実に美観であつた印象が強く残っている。

済南の名が我が国の一般に知られるようになつたのは、１９００年の「義和団事件」からであろう。西洋列国の中国侵略が激しくなるにつれて、それに抵抗する義和団が華北各地に拡がった。

「反清復明」（満州族の清朝に反対して漢民族の明朝に戻す）のスローガンが、やがて西洋人に向けた「滅洋」思想となり、その目標はキリスト教会や教徒であつた。

遂にドイツ公使を襲撃して殺害し、８ケ国連合軍は天津・北京等の主要都市を制圧した。その結果、西太后は光緒帝を連れて北京を脱出したのである。

「済南事件」次ぎに発生した済南事件は有名だ。１９２８年（大正１４）北伐をめざす国民革命軍は、北京に向かって三方面から進軍を開始、北伐軍の総勢は約９２万、うち蔣介石直系軍は約３８万であつた。

当時、青島には在留邦人１万３千、済南には２１００人が居住し、各種の権益をもつていた。済南に入城した北伐軍と、居留民保護の目的で出動した日本軍とが衝突し、日本軍は済南を占領した。そして済南事件後は排日気運が増大し、次第に日本の大陸出進の端緒となつて行ったのである。極く近い日本との歴史をもつ済南である。

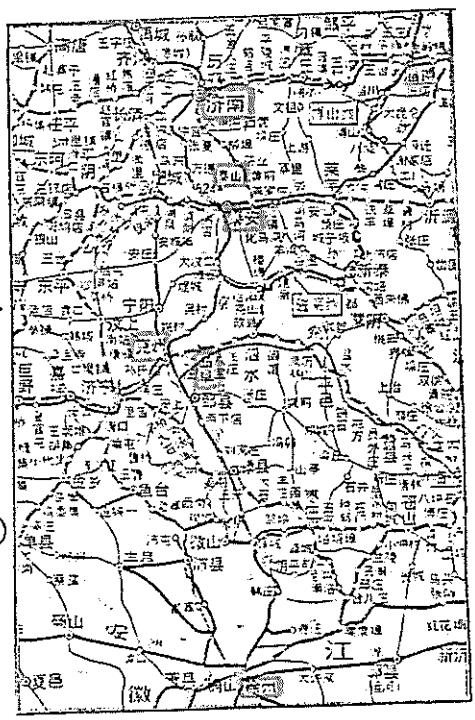
ホテルに落ち着いて夜が深まるにつれ、青春時代の済南を思い出す。連隊長と共に青島へ、或は軍の教育のために済南へ出張した当時は、青雲の志に燃えていた。特に陸軍大学校の学科試験のため、当時済南にあつた軍司令部で受験したことが懐かしい。

初めて受験の資格がついた途端、湯口連隊長の命令で、無理矢理に受験させらた格好であつた。

軍内各師団から推薦された２５名の先輩にまじり、最新参者の私は何らの野心も自

信もなく、唯、実戦の心理を思い浮かべて可能性を追求し、真剣に戦術問題に取り組んだ。僥倖にも私だけが合格し、連隊長や師団長が我が事のように喜んでくれた光景を、微笑ましく回顧していたのである。

山東省の概要



山東省は中国本部の東北に位置し、黄海に突出した半島部である。太古は独立した島々だつたが、奥地から流れ出た黄土が堆積して、本部と結び着いたと云われている。

面積は日本の北海道と九州を合わせた程で、省内は山岳地帯が多く、人口密度は中国内でも高く、山東人は勤勉だとの評判が高い。

文化の方面では孔子や孟子の出生地でもあり、我が国にも知られるように古くから学問が盛んで、到る所に文化遺蹟が多く残されている。

春秋戦国時代の雄であつた斉は、西周の軍師であつた大公望呂尚が武王から封建され、済南東方の「臨淄」を都として建てた国である。

(臨淄は現在の淄博市の東北部、右の地図参照)

南北朝時代では南朝の南斉、北朝の北斉であつた処でもある。

山東半島の有名な良港の青島は、明時代には倭寇と称した日本人の海賊団が出没し、これを防ぐために水師営を置き、北洋艦隊の根拠地であつた。

日清戦争後は青島はドイツに、青島北方の威海衛はイギリスに租借された。第一次世界大戦後、青島や膠済線（青島～済南）の権益は日本に移管された。

6月4日（土）晴

泰安

残念ながら済南の見学は割愛され、８・３０に斉魯賓館の出発となり、高速道路を快走して泰安市へと南下した。西方に大平野が遠く拡がり、東の雄渾壮麗な泰山連峰を眺めながら、２時間後には泰安市の泰安大酒店（ 酒店はホテル）に到着した。。

泰安市は名峰泰山の登山基地であり、歴代皇帝が封禅の儀式を行った岱廟のある処でもある。

部屋から望む泰山は紺碧の空に容貌優傑に聳え、神気を感じるような峰が寄り添つて、樹々はそれに従ひ、恰も大軍統率しているような情景であつた。歴代皇帝が泰山に登頂したことが首肯けたのである。

霊峰泰山

泰山は山東省の泰安平野に巍然として聳える、標高１５４５ｍの宗教上、有名な山である。中国の５岳の中の東岳で、岱山、岱宗、東岱と呼んだこともある。（宗は親元、即ち５岳の長の意味で、岱は泰と同意語）

中国では古代から歴代の皇帝が山岳の神霊を祀り、其の中で５岳が最も尊ばれた。５岳とは山東省の泰山、陝西省の華山、河南省の嵩山、湖南省の衡山、山西省の恒山で、中でも泰山が最高位であつた。

又、東・春・青などを配して、前記のように東岳・東岱などと呼ばれ、万物の始めで生死を司る神霊として尊敬された。それだけでなく、歴代の皇帝は山霊の祭礼を行って始めて、新政権が天下に認められると考え、泰山の威力は絶大であつた。

泰山は封禅の儀式（次ぎの泰廟の項で記す）が行われて崇められたのは、古代の全ての民族が行ったように、又現代でも文化の低い民族間で行われているように、山・川などの自然物崇拝の信仰心から来たもので、殊に中国では地理的事情が、この信仰心より多く持たせた。

日本のように天恵の多い国では此の気持の理解は難しいが、中国のように大平野の続く無変化の大陸に住むと、つくづくと自然の力の偉大さを感じる。

我々が幾度となく体験した黄河の氾濫に就いていえば、日本の九州や四国ぐらいの面積が、水の底に沈むことも度々であつた。それを考えると、中国人が山岳を崇拝する心理は理解出来るようだ。

「国を泰山の安きに置く」「山は泰山より大なるはなく、史も泰山より古きはなし」「義は泰山より重く、死は鴻毛より軽し」「泰山を挟んで北海を超ゆ」「泰山鳴動して鼠一匹」「泰山の霤も石を穿つ」「泰山は土壌を譲らず、故に大なり」「泰山は土石を辞せず、故に能く其の高さを成す」「泰山其れ頽れんか、梁木其れ壊れんか」「泰山前に崩るるも色を変えず」「泰山卵を圧す」。その他、太山（泰山のこと）を称えて作った故事は数限りない。

或は泰山は動かぬことの代名詞にも使われ、「泰平」が変じて「太平」となり、「泰初」が世界の原始、宇宙の始めという意味を表わし、「泰山北斗」は衆人の仰ぎ尊ぶ人物とされたのである。

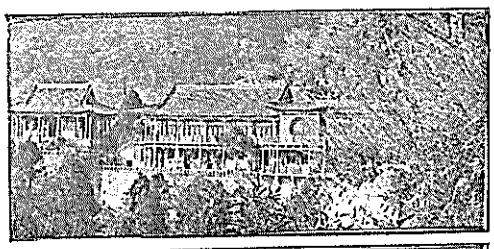
珍しいことだが、「岳父」という辞の由来は次ぎの通りだ。岳は大きな山のことで泰山のこと。又、泰山の頂には丈人峰という峰があり、丈人は長老を意味しているから、岳父とか岳翁、岳丈の言葉が出来たのである。

杜甫は兗州（明日ここから乗車する所）で「岳を望む」と題して、次ぎのように詠んでいるが、泰山を良く表現している。

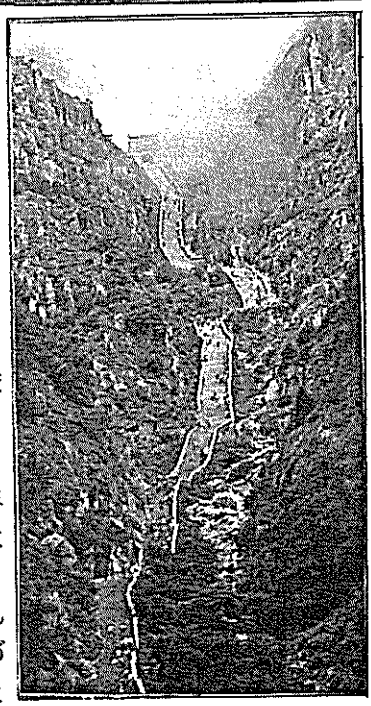
「岱山夫れ如何　　斎・魯　青未だ了らず　　造化　神秀を鍾め　　陽陰　昏暁を割つ　　胸を盪かして曽雲生じ　　眥を決して帰鳥入る　　会ず当に絶頂を凌いで　　衆山の小なるを一覧すべし」

大意は（山の宗家、泰山はいかに。斎と魯にまたがって青い色は涯しもない。造化の神が秀れた気をこの地にあつめ、山の南と北では夕暮と暁を異にするほど高く大きい。層雲のムクムクと生ずるのを見れば、胸はとどろき、山のねぐらに帰る鳥を見送れば、まなじりがさける。いつか必ず、この山に登って他の山々を低く見てやろう）である。

泰山登山



泰山は山麓から山頂まで４０支里（６支里が日本の１里、４㎞）と中国の古書に書いてあるが、日本里に換算すると７里弱。しかし之は山道を変に計算して誇大に云ったもので、大体２里・８㎞ぐらいでなかろうか。しかし中国のパンフレットには２０㎞となっていた。



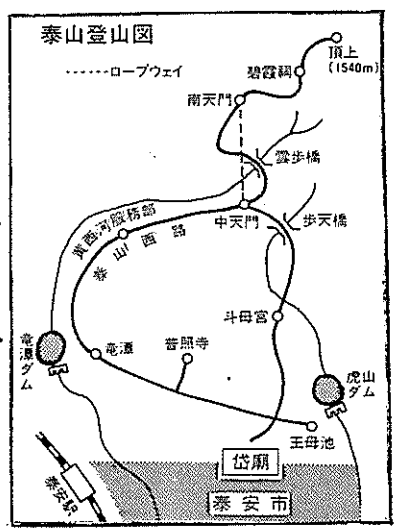
徒歩で登山すると麓から約７０００段の階段を登攀しなければならず、１２・３時間を要するという。少し精密に見学するためには、山中に５・６泊しなければならない。泰山及び附近の名所古蹟を一巡するのには、１ケ月は必要だとの説明があつた。

昔は登山者は駕に乗ったが、平地の駕と異なり、藤の肱掛椅子の中央部両側に、長い棒を通したものらしい。

戦中、私は津浦線に乗車して何回か泰安を通過した。双眼鏡から泰山を覗き、曲折した石段を眺めた記憶は薄れていない。（右下の写真）

名声高い泰山には生涯必ず登りたいと念望したが、４０数年後の今日、漸く実現の運びとなつた。１９８３年に日本の協力でロープウェーが完成し、日本人登山者は年間約５０００人だという。

澄み渡った空に雲一つなく、絶好の登山日和に恵まれて、バスは泰山に向かった。左に竜潭ダムを眺めてつづら折りの公路を登り、ロープウェー乗車場の中天閣へと進んだ。（上の写真は中天閣）次第に下界は小さく見えて、深山幽谷の谷間に滝が流れ、快い響きを立てて爽やかな感じがしている。



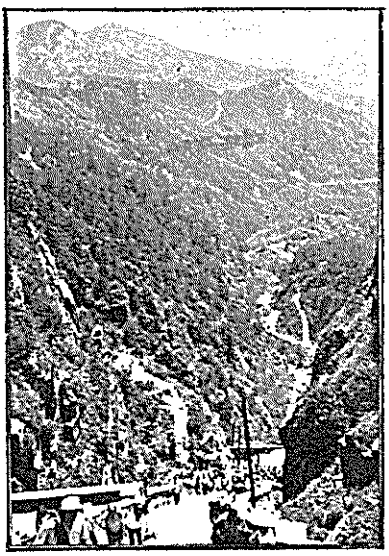
天下の名峰を征服せんと夢みた人達が押しかけ、中天門の駐車場は満杯の盛況だ。標高１３００ｍのレストラン（昼食）から眼に映る景観は名画以上の風致で、高峰は鋸の歯のように陽を浴びていた。

ロープウェーは直線距離が２７００ｍ、比高１５０ｍの月観峰へと懸り、毎秒７ｍの速度で所要時間８分、３０人乗りのゴンドラが吊るされている。

ロープウェーの渡る眼下の情景は、絶妙な名峰の趣を表わし、箱根の険を登るような九十九折りの石段が、羊腸として山峡に糸を引いている。千刃の涯峡の美は筆舌に尽くせないものがある。

月観峰の駅から南天門にかけて、絶壁を切り開いた登山道が尾根に伸びている。３層の碧瓦・朱塗の南天門に掲げた「摩天閣」（清代のもの）の額は、逍遙と

して脚を運ぶ我々に神気を感じさせていた。下界に通じる千層の石段は、恰も空に懸けられた梯子のようで、数千年の興亡の歴史が、絵巻物として繰り広げられていた。（右の写真は千層の石段）



「天街」と彫刻した石坊が断崖の上に聳え立ち、天の街と云われる町は宿場となって、霊気の中に建つていた。忘我陶酔の仙人の住まいの感じだ。

「五嶽之尊」「山高望遠」「日遷雲低」と摩崖に泰山を称える辞が刻まれて、彼方此方から啼鳴の声が聞こえていた。そのうえ奇峰に孤松の生えた風光は、秀麗極まりなしの眺めであつた。

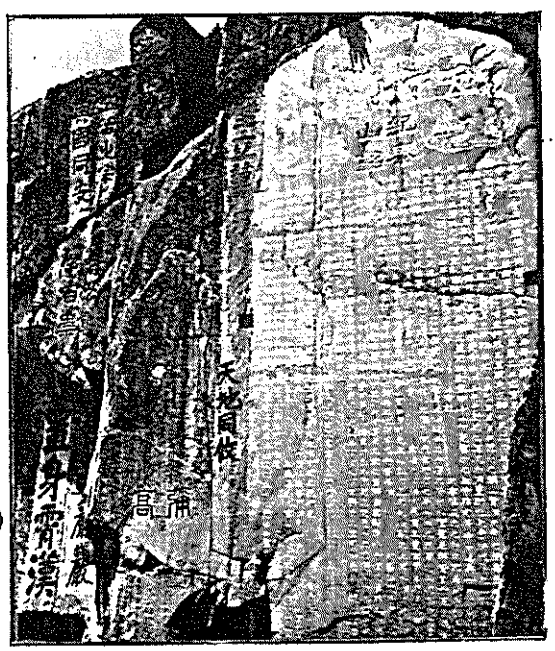
右に膽魯台が見えていた。孔子が泰山に登って魯国を眺め、自分の国の何と小さな国かと嘆いた峰だろうか。

左は頂上の玉皇頂に通じ、西神門を過ぎた所には碧霞祠（宮）が建っていた。碧霞は神の名前で山上の女神として祀られ（上廟という）地の神が麓の岱廟（下廟という）となつている。銅板葺の拝殿と「福綏海宇」と書いた鉄板葺の本殿が建ち、本尊は女神らしく王冠を被っていた。（泰山は道教の山）

日観峰を右に見ながら「五嶽独尊」の石碑の前を通り、頂上に登る石段を膝を折るようにして上がると、頂の広場となつていた。

玄宗皇帝の「天下大観」の長文の詩が、大岩盤を平らに削って彫刻され、その摩崖碑は燦然と金色に輝いている。（下の写真）

それに連なり「壁立万仞」「天地同攸」「彌高」「興国同安」「登泰観海」「置身霄漢」「呼吸尊宇廟祭」「雲峰」「礼乾潤漢」等、文字の国らしく盤石を彫み、一面を埋め尽くした景観は、実に気宇雄大である。

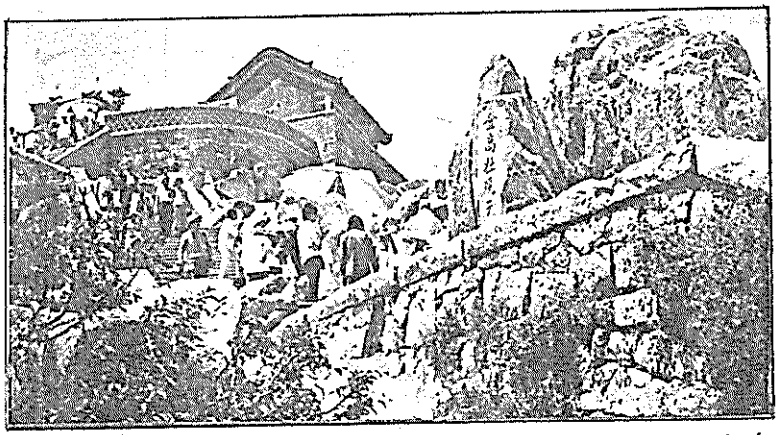


名を竹帛に垂れた７２人の皇帝が泰山に詣で、神に祈願した心境を披瀝している。過去も現在も未来も此の頂上に立つと、恐らく天下太平の曙光が満ち溢れるような感銘を受けるに相違ない。

玉皇頂（最頂上）の最後の階段の傍らにも、「摩天捧日」「登高壮観天地間」「仰観俯察」「絶頂」などの、数え切れない摩崖碑が刻まれ、「勅修玉皇頂」の額を掲げた朱塗の門に辿り着いたのである。念願成就だ。

頂上には「急光普照」（あまねく照す）と書いた殿宇が建ち、楼の前に大岩石が据えられていた。夢叶つて泰山を征した一瞬は、覇者か王者の気分であつた。

歓喜が爆発した頂上は満目凄涼、眼界を遮るものはなく、一望千里の世界が展開した。天は朗らかで気は清く、仰いで宇宙の大なるを見るという感じだ。山頂の岩に腰をおろし、いながらにして凡てを忘れると云う「坐忘」の一端を味わっていた。



その喜悦は疑う余地のない純粋なもので、「良心と誠」に燃えた昔日の天子の心中を偲んだのである。

永遠の間の僅かな一閃に過ぎない人生を、その運命を主宰するものは天だと、霊峰泰山は我々に教えていた。懐かしい想い出は遠くの黄河の方を展望させ、飽くことを知らない玉皇頂を満喫していたのである。

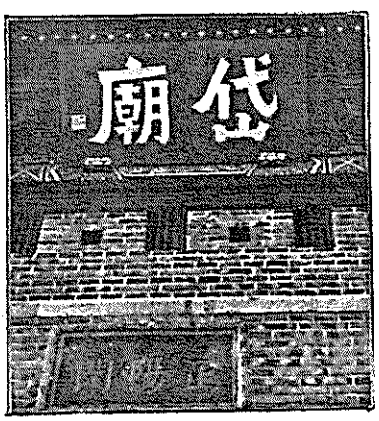
鶯のさえずる来た道を下ると、路傍の木の枝が折られているのが目に着いた。女性が泰山の木の枝を髪にさすと、福を招来するという謂れがあるらしいが、何処の国も同じだ。山は高いから貴いのではなく、樹があるから貴いことを意味しているのだろうか。樹木の少なかった中国らしい発想である。

南に漠々と拡がる広野を眺めながら、遠く彼方の徐州を想起して南天門のロープウェーへと下って行った。（徐州は泰山南方２００㎞、３８頁地図参照）

岱廟

地を抜き天に通ずという気宇壮大な泰山は、天下の指令所ばかりでなく、天然の博物館のような感じであつた。山麓に着いて下廟の岱廟へと案内されたが、泰山と岱廟に足跡を残さなければ、泰山に登つたことにならない。（泰は岱に通ず）

岱廟は泰安県の西北に位置し、泰山の神霊を祀る神殿である。（現在の神殿の建物は明代に改築したもので、下の写真は正陽門に掲げた大額）

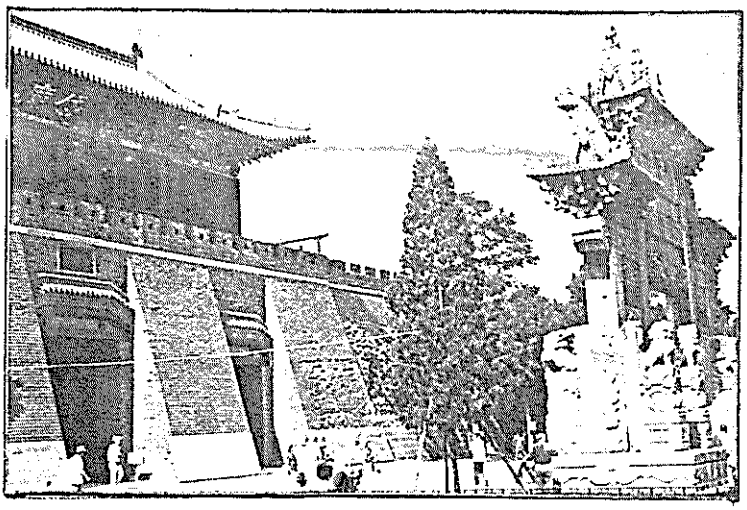


バスは正陽門の前で停車した。金色に輝く「岱廟」の額は神々しく光り、約１０ｍの城壁の上に建つ楼閣は黄色の瓦をのせ、門の前の石坊は神霊を感じさせていた。

この南面した正門を嶽廟門（正陽門）といい、廟の庭内には老樹が茂って天を蔽っている。通路の両側には唐・宋以下各時代の碑が林立し、中でも石の亀の上に建った２０トンもある碑は、他を圧倒して抜きん出ていた。

広い廟庭の中で我々を注目させたのは「漢柏」であつた。この漢柏は廟内に６株もあり、清の乾隆帝の

漢柏の図碑もたっている。



続く配天門・仁安門を過ぎると、「東嶽大帝」（泰山大帝）を祀る本殿、「宋天貺殿」が厳かな威容を現した。これが所謂、「峻極殿」で貺は助けるという意味だ。

北宋時代再建のこの殿堂の間口は約１６ｍ、奥行は約１１㎡で、碧瑠璃瓦を葺いた建物は宏壮の上に重々しい感じがする。

歴代の皇帝が泰山の神を祀り、「封禅」の儀式を挙げた大典の所で、秦の始皇帝以来から受け継がれている。（上の写真は正陽門と石坊）

唐代以降、盛んに増修築を施した此の本殿は、北京・故宮の大和殿、曲阜・孔子廟の大成殿と共に、中国三大宮殿の一つと云われ、其の中で最古のものである。

殿内には「東嶽泰山之神」の大額が掛かり、四周の壁には明代の巨匠の手による「帝王封禅の図」（歴代７２人の皇帝）が描かれている。特に神宗皇帝の絵は素晴らしいものであつた。（泰山登山の図）

本殿の東にある炳霊殿の前の漢柏は、漢の武帝が封禅の儀式を行った時の手植えの柏で、紀元前１１０年という古い歴史を物語つていた。

廟内の環詠亭は文人史家の最も興味のある処で、周囲の壁には歴代の登山者の詩賦題記の石刻がはめられている。中でも貴重なものは、秦碑の破片を継ぎ合わせて、ガラス張りの石の中に埋め込んだものであつた。

この秦碑は秦の始皇帝が天下六ケ所に、自分の功徳を表わすために建てた碑で、２世皇帝が補足を加えたものと伝えられている。その一つは泰山の絶頂に建てられた。

当初は東嶽廟内にあつたが、後に碧霞宮内に移され、約２０００年間無事に保存されていた。しかし清朝乾隆５年（１７４０）の火災によつて砕けたと思われたが、それから７４年後、２個の破片が碧霞宮の側にある玉女池から発見されたという。（右の写真は漢柏）

次に案内されたところは「第一山」と刻んだ石碑のある処であつた。この碑は明の嘉靖３９年（１５６０）に建てられたもので、石段を登ると「孔子登臨処」「天階」と刻んだ二つの門があり、その奥に「紅門」があった。孔子も此の岱廟の地で祈願してから登頂したのであろうか。

「登泰観海」と書かれた石壁を眺めながら、乾隆帝の像を祀る殿宇の拝観となつた。乾隆帝は泰山に登ること１１回に及び、それを記念したものだろう。

廟内に描かれた絵画は無声の詩であろう。また詩は有声の絵画のようで、由緒ある岱廟を拝観したことは、登頂と共にも誠に意義深いものであつた。

初心にかえって祈願した皇帝達も、その行く末は如何であつたか。武力で威圧して仁政をよそおつた者は覇者に過ぎず、徳の心をもつて仁政を行った者は真の王者であつたと思う。このことを日本の為政者に当てはめると、「武力」を「金力」に置き換えて考えるべきである。

封禅

封禅とは泰山の頂上と麓で行う国家的宗教儀式である。山上での「封」の儀式は天を祀るもので、山麓の此処「梁父」で行う「禅」の儀式は地を祀つるのである。

封禅の宗教的儀式が皇帝によつて重要視されたのは、秦の始皇帝が紀元前２１９年、漢の武帝が紀元前１１０年に相次いで行った時に始まつている。

黄帝（古代伝説の三皇五帝の一人）が封禅の儀式を行い、天に上って仙人になつたという伝説が伝わっていた。不老長生を求める君主の秦の始皇帝、漢の武帝、後漢の光武帝、魏の明帝、宋の真帝らは、道教道士の言を信じ、莫大な国費を使って此の儀式を行ったのである。

秦の始皇帝は即位した翌年から５回にわたつて全国を廻り、各地の名山に上って自分の行った天下統一と中央集権政治が、如何に優れているかを石に刻み、天下に示そうとした。

第１回（前２２０）は西の甘粛方面に、第２回（前２１９）は東方の鄒国（山東省で曲阜の南の県）の嶧山に登り、魯の儒学者と天下を支配する者にとつて、最も大事な封禅の儀に就いて論じている。此の後、泰山に登って刻石を建て、頂上に天を祀る祭壇を作った。（第３回以下は略す）

漢の武帝の漢代は、神秘的な色彩の強い時代であつた。

人間界の超越した存在として、神と交わり祭祀を行う特権を持つ天子という身分を、武帝は強烈に意識した。単に神と交わるだけでなく、神の領域へ、不死の世界へ、人間の身をもつて足を踏み入れたいと念願した。そして仙人に逢って封禅の祭をすると、不死になることが出来ると信じたのである。

以来いろいろな祭を行い、その頂点となつたのが前１１０年の封禅であつた。

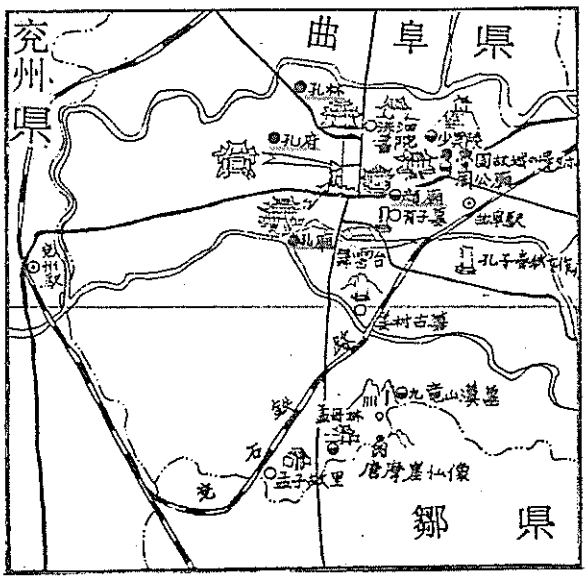
封禅は前記した通り天下太平を実現した君主が、その成果を上帝に報告する儀式で、君主だから誰にでも行うことの出来るものではないと、信じていた。

この祭は山東省の泰山で行われた。「封」の儀は泰山で天を祀り、「禅」の儀は山麓の梁父で行われたのである。これらの儀式は皇帝親祭の秘儀であつたから、式に関する文献は残っていないという。

然し乍ら、武帝の晩年は悲劇で、我が子の皇太子を殺している。神秘への傾斜が迷信に深入りした例といえるだろう。

6月5日（日）晴

曲阜



早朝に目が覚めた。窓越しの泰山のうねりは神秘的に陽を浴びている。神を知る人間には２種類があるとパスカルの云った言葉を思い出していた。

「利口でも馬鹿でもかまはないが、謙虚な気持を持つ人と、真に聡明な人々と、この両者が神を知るのだ。傲慢で、中途半端な理性しか持たない人々だけは、神を知らないのだ」実に味のある言葉である。

泰安のホテルを８・３０に出発して、約２時間行程の曲阜に向かった。今では高速道路が新設されて快く走った。勿論、日本のようなものではなく、中国としての高速道路に過ぎない。

此処は山西省と比較して温暖な気候のために、農村の麦刈りは最盛期を迎えていた。旧態依然として風を利用した麦の選別作業は、懐かしい風景であつた。

山東省は聖賢が多く生まれた地方で、世界三聖の一人として万代の後までも師と崇められた孔子（曲阜）や、孔子の教えを広く伝えて世界的な道徳教育に育てた孟子（鄒県）、その他、後世にまで其の名を伝える多数の儒者が輩出している。

其の中の筆頭で聖人と呼ばれる孔子（前５５１～前４７９）は、曲阜の生まれだと云われ、孔子の墓と廟があり、我が国にも霊地として広く知られている。又、孔子の直系子孫の住む家「孔府」のある処でもある。（上は曲阜附近の地図）

曲阜は泗水の南岸にあつて同名県庁の所在地。周（前１１２２～前７７１）の始め、周公の子の伯禽が、東方を治める根拠地として封ぜられたという。孔子の時代には春秋時代（前７７０～前４７６）の魯の国で、魯城とも呼ばれ、隋代以降は曲阜と呼ばれるようになつた。

曲阜の魯城は長さが３、５㎞もあり、曲がった形をしていたから曲の字が生まれ、阜は豊かな丘という意味である。

昔の魯の都は今の曲阜の少し西南で（孔林の場所）、宋の真宗の時に現在の場所に移し、明の武宗の正徳８年、城郭を修理している。当時の城壁の周囲は約３０００ｍ、高さ６ｍ、５つの門があつて正門を仰聖門と称し、東南が崇信門、東が東礼門、西が宗魯門、北が廷思門となつていた。しかし現在では其の一部を残すに過ぎない。

歴代の皇帝は孔子を先師として尊敬し、弟子の礼をもつて祀つた。その為に孔子の墓や廟に対して敬意を表したことも、非常なものであつた。孔子の一家は約２４００年にわたつて皇帝や為政者の保護を受け、今日まで続いて墓と廟を守っている。現在、孔子の姓を名乗る者は凡そ１３万以上ということである。

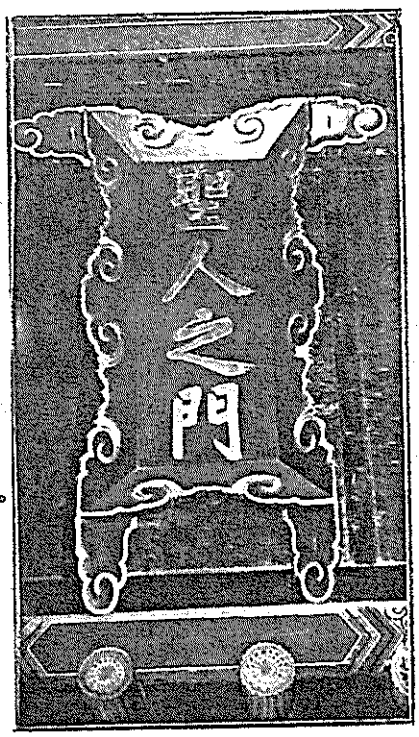
勿論、歴代王朝の支配者達は、孔子の思想を権力の精神的な支えとしたのである。

青い緑に囲まれた曲阜の街は、並木の枝先が糸を垂れるようにさがり、その間隙から朱塗りの楼閣が見え隠れしていた。バスは「孔府」の一角を占める「闕里賓館」に停り、暫くの休憩となつた。（闕里とは孔子が初めて教学を垂れた所の意）

私が戦袍に身を包んでいたころ、屡々列車の窓から聖人の里・曲阜を眺めた。当時は農村地帯には殆ど樹木がなく、一目瞭然として城壁が見えていたが、今はすつかり変貌して昔日の面影はない。

儒教思想で育だてれられた我々年代の者にとつては、曲阜は最高の憧憬の地であつた。其の垂涎の的であつた曲阜に、現実に足跡を印したのだ。喜びに堪えない。

孔府



曲阜の見学は孔子の子孫が住んでいる孔府から始つた。孔府の一部を利用したホテルを出ると、街路樹は濃い木陰をつくり、右手に明代の鼓楼が聳えて神気は泰安以上の感じだ。

「聖府」と掲げた「王府門」は直ぐ左手前に、古色で豪華な構えを見せている。徳を慕う中国人観光客は後を絶たず、殷盛を極めていた。

中国の歴代王朝は孔子の子孫を厚く待遇し、孔府は此れを管理するの公式な事務室と、私邸とを合わせた総称である。

特に北宋の至和２年（１０５５）、第４６代直系子孫の孔宗願が、皇帝から「衍聖公」に封ぜられた。この時から３２代を経て約９３０年間も其の待遇が踏襲されている。

孔子の直系子孫は殆ど「孔宅」に住んでいたが、１５世紀の弘治年間に拡張されて「孔府」を賜り、次第に増築されて現在の規模になつた。総面積は約１６ヘクタールに及ぶという。

「府」とは元来、蒙古の王府と同じく、邸宅の意味ではないかと理解している。

王府に入ると朱塗の「聖人之門」（上の写真）があり、続く皇帝門は閉つていて、一般人の通行は許されない。奥は漢の高祖以来という庭園が拡がっている。

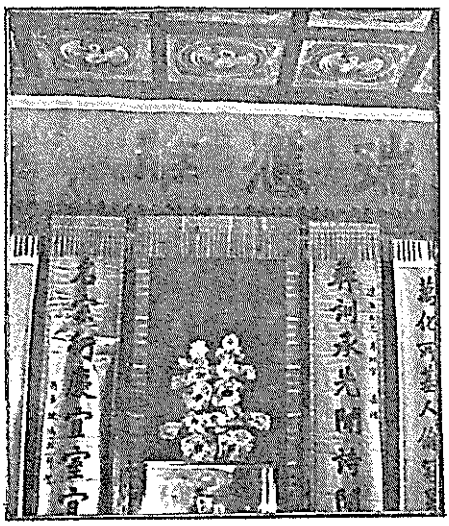
王府内には９つの庭園と４６３の建物があると説明されたが、聖人を称えて子孫を敬う伝統は、古典的で微笑ましいことである。

「襲封衍聖公」と朱記した門の後方に「六代舎飴」と掲額した家庭裁判所が建っていた。昔は口の中に飴をいれて裁判したと説明していたが、稍々疑問だ。

これから西側が客室、東側は孔家の廟、中央は官庁となつていて、大殿・２堂・３堂・その他の建物が建っている。これらの役所地域から先が私邸である。

私邸の内宇門をくぐると左右に使用人宿舎があり、「宏開慈宇」と書いた殿宇が続いていた。即ち身内用の間として使用したもので、左側が第７６代（先代）の居間、右側が姉（現在・北京に住む）の部屋、中央が応接間となつている。何れも中国の家

庭としては絢爛豪華なもので、厚遇されていることが窺える。



続く「松筠永春」（筠は竹の意）と掲額した２層の「前堂楼」は、第７６代及び姉の寝室で、其の儘の状態で保存されていた。此の楼の前庭にはザクロの木があり、ザクロの実にちなんで多くの子孫が生まれることを願ったという。

次ぎの「瑞応睢麟」（睢は目をみはる意）の垂れ幕がある２層の「后堂楼」は、現在の第７７代「孔徳成」の住宅で、結婚式を挙げた建物である。

此の前庭にもザクロの木や柏の木が茂り、不滅の繁栄を表徴していた。然し乍ら、ここに棲むべき第７７代当主はアメリカに滞在しているという。恐らく文化大革命の批林批孔の声が盛んであつた頃、アメリカに逃避したのではないだろうか。その点に就いての説明はないが、誠に心痛の至りで声なしだ。（上は后堂楼）

孔府は孔家の権力を窺わせる壮大な邸宅で、廟・役所・私邸が一つになり、典型的な封建貴族の荘園造りだ。殊に庭園をはさんで建っている身内の建物は、室内、廊下は格天井をめぐらし、華麗なランタンが吊るされて、古色蒼然とした中に豪華さを誇り、儒教の祖として帝王待遇だつたことを証明していた。

孔林

孔林は孔子一族の墓地があるところで、「至聖林」とも呼ばれ、曲阜の北方約７００ｍに位置している。

言うまでもなく孔子（前５５１～前４７９）は春秋時代末期の思想家で、儒教の創始者である。我国の学問・教育の中核として尊敬され、我々は孔孟の教えの中で育つて来た。

周の周公の教えと政治を実現させようとしたが、魯王に用いられず、諸国を漂泊した後に魯国に戻り、「書経」詩経」を編纂して子弟を教えた。「君君たり、臣臣たり」という思想は、封建社会に根を下ろしたのであつた。

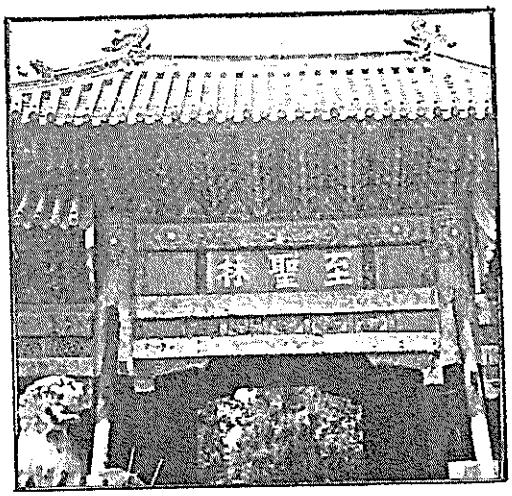
前４７９年に亡くなったが、その死を悲しむ弟子達によつて、魯の都・曲阜の北、泗水のほとりに葬られ、墓の附近には諸国から持って来た珍しい木が植えられた。その後、孔子の地位が高まるにつれて益々孔林は拡張され、１８世紀の清の雍正年間までに現在の２００ヘクタールの規模になつた。

孔林には楷・桧・松・柳など１０万本以上の樹が植えられ、その中に湯島聖堂から送られた桜は毎年美しい花を咲かせているという。（楷は日本にはない）

墓の数は１０万基以上もあり、実際には数え切れないらしい。又、孔林の中には李東陽、厳嵩、翁方綱、何紹基、康有為などの有名な学者の書いた碑が建っている。

篭見ゾ七は午后から始まり、バスは顔子廟を経て曲阜城（文革時破壊）の北門を通過すると、柏の老木並木が茂り、林前村にある「至聖林」の門前に到着した。

［顔子廟］［顔子廟は顔子（前５２１～前４９０、名は回、字は子淵）を祀る廟である。顔淵は乞食ような貧乏生活をしながら孔子の道を聴き、徳を磨くことに精進した人で、我々は良く漢文で教わつたものだ。



論語に「一簞の食、一瓢の飲、陋巷に在りて、人は其の憂いに堪えず、回や、其の楽しみを改めず、賢なるかな回や」とあるように、粗食して小屋に住み、普通の人はやり切れない事を、彼は道を聴くことが楽しくて、生活難などを問題にしなかつた賢者だと、孔子が褒めた人である］（顔子廟を通り付記する）

至聖林の門の前通りには、中国人観光客が乗る絵を書いた古風な馬車が列をなしていた。孔子の里に相応しい光景である。

至聖林に足を運ぶと直ぐのところに「儒宗左念」と彫刻した石坊（石の門）がある。その右手の楷と柏の木が鬱蒼と茂った間に、第７６代（当主の父母）の墓が立っており、偕老同穴で祀られている。

石坊を過ぎると王墳の前と同じように、石獣と文官（左側）・武官（右側）の石の立像が並び、霊地の雰囲気を漂わせていた。

周囲７㎞、７０万坪の広大な大森林を、中国人は徒歩で回って見学していたが、幸いにも外国人はバスに乗車のままで許され、森の天井、森の屋根というか、林冠の中を進んで行った。

古来、森は人間にとつて神秘的で宗教性を帯びた存在であつた。日本では神霊が人間の世界に降臨する場合、中継地の役割を果たしていた。中国でも昔から墓地に樹木を植え、その木には土地柄と墓地の持主によつて種々のものがあつた。一寸した森があると、あれは墓地だと判断した戦中が思い出された。

第７２代の大きな墓碑が見えた。清の乾隆帝妃は第７４代の娘が嫁ぎ、この為に、このような立派な碑が建立したのであろう。漢満民族の親善友好の象徴である。

続いて第７３・７４代の墓碑があり、奥まつた処に土饅頭の墓地が見えていた。（現在は埋葬は許されていない）これらの土饅頭は孔子在世中、その膝下で教えを聴いた諸弟子の墓で、墓石は数え切れず、大小の楼閣も１６０以上だという。

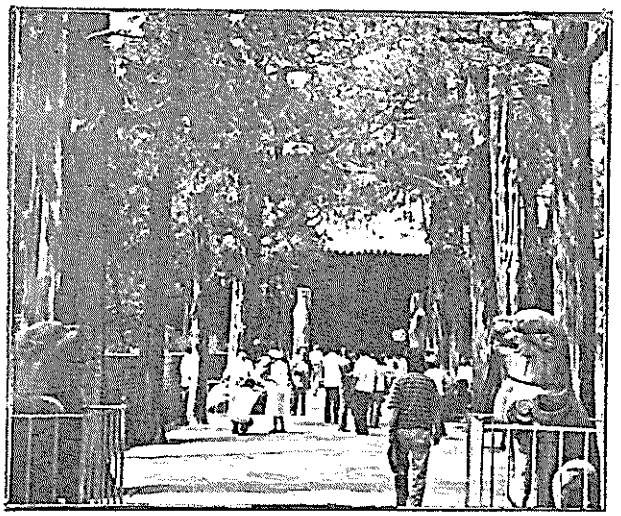
バスは清代から明代の墓地に入り、第５４～第６４代の直系の墓が大小さまざまな形で立っていた。此処から左が北宋時代、右が元の時代、再び左が唐時代と変わつて、古い歴史を現実に眺めるようであつた。

墓地を見学して感じることは、其の時代の勢力や経済力よつて、それぞれの規模や様式が違い、興味深いものがある。然し乍ら、文革時には悉く倒されたのであつた。

バスは「沫水橋」で停車して我々は此処で下車した。楷の大木が天を蔽つて薄暗く、鬱蒼とした林冠の下に清水が僅かに流れていた。一方、周時代の魯城の土壁が、木立の間に帯のように黒く、低く見えていた。紀元前の城壁は万里の長城の比ではないだろうと早速、草叢を掻き分けて近ずき、シャツターを切った。大成果だ。

沫水橋は孔子の墓に通じる石橋で、地図を見ると孔林入口の直ぐ左側だ。昼なお暗

い大森林を通過して、方向感覚が麻痺したが、丁度、孔林を一回りしたのであつた。



沐水橋を渡って参道を進むと、老樹の蔭に豹の石獣と「角端」の石像があつた。「角端」という字は角が一本しかなく、孔子の博学と正直を表わしているのだという。流石に文字の国だ。

この先に歴代皇帝が礼拝した祭祀殿がある。（右は祭祀殿と角端の像）

祭祀殿を過ぎると「子貢手植楷」の石碑が立っていたが、子貢の植えた楷の木は今は枯れている。

更に奥には「子貢廬墓処」の石碑と家が立っていた。孔子の死後、弟子達は一般に3年の喪に服したが、ひとり子貢だけは6年間、墓の側の廬に留まつたと伝えられている。これが其の古蹟で明代に修築したものだ。我々年代の者にとつては懐かしい論語の一節である。

道路の突き当たりに「泗水侯墓」がある。これは孔子の長男「伯魚」の墓で、泗水と諡されたからである。そこを左に折れると、大きな墓地と墓碑が我々の眼を引き付けていた。これが孔子の墓であつた。

墓の周りにある老木は、各地から集まって来た弟子達が、故郷から持ち寄つて植えたもので異種珍種が多く、中でも楷の木は曲阜独特のものであろう。

墓碑には「大成至聖文宣王之墓」（右の写真）と彫まれている。この「大成至聖文宣王」という称号は、元の武宗が追贈したものである。

孔子在世中は重く用いられず、魯の定公に仕えて司冠という低い官吏だつたが、漢の平帝の時に「褒成宣尼公」と諡し、唐の玄宗の時に「文宣王」とし、宋の真宗は「至聖文宣王」となし、元の武帝となつて「大成至聖文宣王」と追加した。今の墓碑の称号は之に従って明代に刻んだものである。

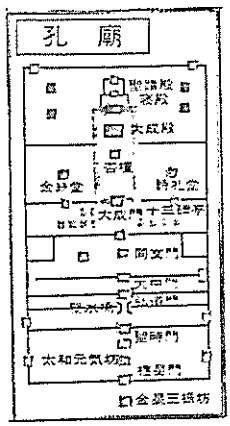
その後、明の嘉靖年間に孔子に王号を付ける可否について、学者が大論争をやつた後、単に「至聖先師孔子」と称すのが適当ということになつた。清朝になつても、各地の孔子廟は悉く此の称号を使用することになつたが、曲阜の墓碑の文字だけは、明の初めのままで改刻されずに存在している。

孔子の墓前に立った時、「桃李、言ざれども、下自ら蹊を成す」の故事を想起したのであった。徳のある人の処には、何も云わなくとも自然に道がつき、人が集まつて来るもので、

この故事のように、孔子の徳を慕って参詣する人は、門前市をなしていた。
心が静まってくると林間の風の音も、天地自然を教えているように聞こえて来た。孔子の教えは「天の道を地上で行う」という、天地自然を理としていたのではないだろうか。
心の教育をしなければ禽獣に等しいのだと、孔子は語りかけて来るような感じを抱いて、墓前を去つたのであつた。

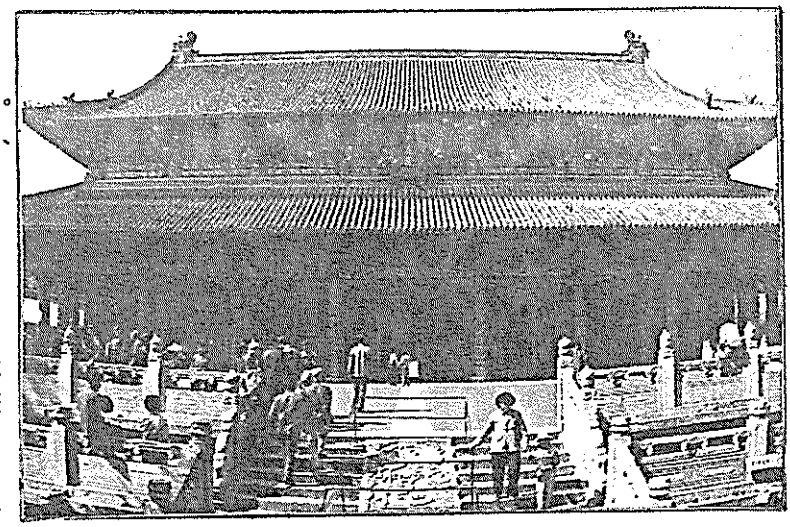
孔廟

孔林から南へ一直線の道路が走り、道の両側には蜿蜒と老柏が続き、「万古長春」の石坊や「仰聖門」を通つて孔子廟に向かった。
孔廟は孔子が死亡した翌年（前４７８）、魯の哀公が「家に因て廟と為す」と言われて建てた廟である。
紀元前１世紀、前漢時代の半ば以降、儒家思想は封建社会の正統的な思想となり、孔子の名声は高まった。その後、１８世紀の清の雍正年間まで、２０王朝が６１回もの拡張工事を行い、今のような壮大な規模になつた。（右は孔廟の配置図）



孔廟は楼・亭・殿・閣などの数が４６６にものぼり、総面積は２１ヘクタールである。９つの庭園と、黄色の屋根瓦をのせた壮麗な建築は、封建時代では皇居と孔廟だけであつた。
孔廟は北京の故宮・泰安の岱廟と並んで中国三大宮殿の一つであり、その上、故宮及び河北省・承徳の避暑山荘と共に、中国三大古代建築でもある。
我々一行は「金声玉振坊」（孔子の教え）（坊は門）を潜り、正式な参詣の南門に到着した。頗る壮観な構造をした南門には「万仞宮墻」と朱く刻んだ額が懸かり、孔廟らしい品位を表わしていた。
「櫺星門」（天国の文化の意）、「大和元気坊」（宇宙に孔子の教えを広める意）の門を通り、楼閣式の「聖時門」（皇帝の門）を過ぎると廟庭が拡がり、其処に石像が立っていた。孔林と同じく左は文官、右は武官の像で、王宮の様式である。
東西に流れる玉帯河の壁水端を渡ると「弘道門」がある。之は孔子の徳を弘めるという意味で、自然に参詣者を感化するような感じを与えていた。
大中門、同文門の次ぎに３層の「奎文閣」が豪壮な威容を見せていた。高さ２０ｍの大建築は北宋時代の創建で、現存する建物は明時代のものだ。その庭園には明朝皇帝の御製を刻んだ大石碑があり、漢・魏・六朝の貴重な碑石も保存されていた。
奎文閣を過ぎると碑亭が整然と並んでいる。碑石を保存する建物を碑亭と云い、大抵は２層の荘厳な構えで、現在残っているのは１３棟である。その中に金・元・清の皇帝の御製を彫つた大石碑が５７ケも保存され、比類のない壮観さを呈していた。
碑亭の次ぎに建っている「大成門」の傍に「孔子手植槍」があつた。この木は幾度も火災に遭つて枯れたりしたが、旧根から芽が出て今日まで続いており、現在の木は２００余年ものだと云われている。
更に進むと２層の華麗な「杏壇」が、際立つて我々の眼を引き付けていた。杏壇は孔子が弟子を教えた遺跡を想像して建てたもので、奥床しい感じがしていた。

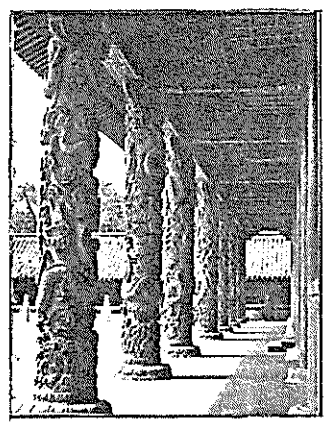
杏壇から十数段の石段を上がると正殿、即ち大成殿の露台である。



大成殿は高さ２５ｍ、間口４０ｍ、奥行き２８ｍもある黄色い瑠璃瓦で葺いた大殿堂である。（右は大成殿）

大成殿の名称は北宋の徽宗が命名したと伝えられ、雍正皇帝直筆の大額が燦然と輝いている。

前廊の周囲にある高さ約３ｍの石柱１０本には、蟠龍が彫刻されていて、刀技は雄渾で精妙を極めている。又、左右及び後方には百花を彫つた石柱があり、回りに石欄が巡らされてあつた。



日光・東照宮の壮観美麗な建物は精巧緻密で名高いが、孔廟は雄大広壮を誇ると云えるだろう。（右は蟠龍の柱）

大成殿には高さ３ｍ余の孔子像が鎮座し、右に顔子・子思、左に曾子・孟子の四聖が祀られ、孔子像の前には「至聖先師孔子神位」と記し、上には康熙帝の「万世師表」、乾隆帝の「斯文左茲」「時中立極」と書いた額が掲げてあつた。

又、殿宇の左右には歴代の先賢１３０余人の神牌も祀つてあつたが、大成殿は文革では破壊されて１９８４年に復元したのである。

大成殿の後方にある寝殿は孔子夫人を祀り、その奥にある聖蹟殿には孔子の一代記を書いた刻石が陳列されている。

大成殿の右側の崇聖祠は孔子の祖先を祀るところで、家系図碑が収められている。この南にある詩礼堂は孔子の旧邸だと伝えられており、詩礼堂の前庭には孔子旧邸の古井戸が残っていた。ここでフイルムが無くなったが、同行の池本さんは井戸を背景にして撮影しくれ、其の好意に感謝したい。

井戸の横には旧邸の土壁の一部が残っていた。これが彼の有名な魯壁である。秦の始皇帝が天下に号令して、書物を悉く焼かせたとき、この壁の中に若干の書物を塗り込んで保存したのであった。それが漢代になつて発見されたが、其の古蹟が此の土壁である。始皇帝の思想統一の政策であつた「焚書抗儒」は、我々年代の者にとつては知らない者はないだろう。

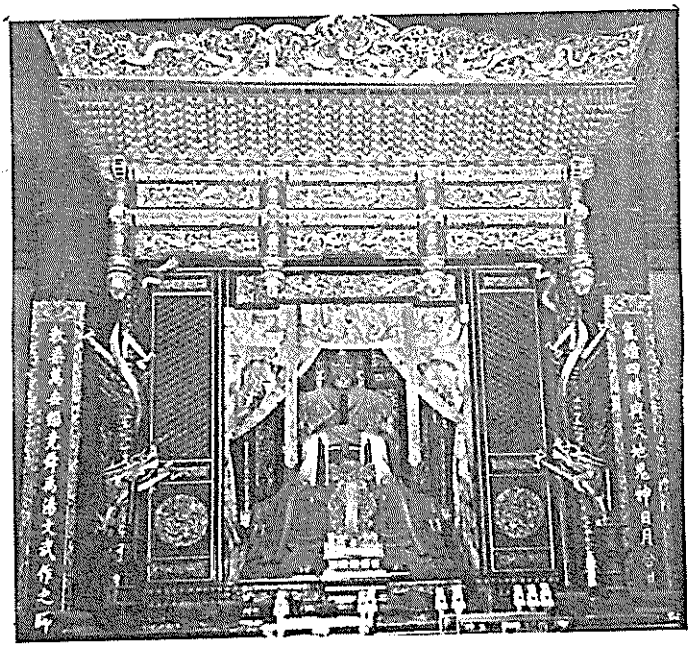
老樹の大木に囲まれた孔子廟、皇帝の宮殿と同じ格調をもつた孔子廟、その一つ一つが我々に感銘を与えるものばかりであつた。

孔子７３年の生涯は精神的、社会的、物質的にも、当世に志を得なかったのである。しかし、道を後世に伝えようと強い志を抱き、自分の人間性の陶冶に一生を捧げた偉

大な聖人である。それは人間とは何であるか、人間とは如何に在るべきか、本当の人間関係は如何に在るべきかという、問いかけであつたと思う。

「人が人として在る」その究極の姿は、「仁」を会得した状態だと孔子は考えた。

これを実現する方法として「礼」の実践が重要であり、礼の実践は「忍耐」即ち自己に打ち克つことであり、それに立ち向かって行ける人が「君子」だと考えた。



孔子のいう「君子」は在位の君子ではない。有徳の君子のことだが、君子の一定の定義は下していない。要は何のために此の世を享けたかを自覚して、行動できる人と解釈して良いのではないだろうか。（上の写真は大成殿の孔子像）

人間は自分一人だけでは存在しない。その存在は常に他の者との関係から成立ち、根本的に在るべき状態を「仁」と云つている。仁は文字の通り「人が二人」以上の関係である。

我々は時代が変化しても、孔子の教えを堅苦しく考える必要はない。要は人間らしく生きることで、「調和」のとれた生き方をすることではないか。

この調和をもたらすのが「礼」である。そして究極の目的は「仁」を得体することだが、そこに至る方法が「礼」である。

このような方法によつて「仁」に到達しようと意識し、行動する人が「君子」だと教えたのではないだろうか。万人が此の君子となつた世の中は、理想的な国家である。

孔子を祖とする「儒教」の「儒」とはどんな意味だろうか。浅学非才の私には判らない。読んで字の如く、人に需（モトメ）られる要素の学問であろう。

過ぎ去った遠い昔の中学生時代を想い浮かべながら、孔廟を辞したのである。

兗州

感銘深い孔子の里を去った。戦中からの念願であつた曲阜の訪れが実現すると、再び又、郷愁愛着を意識するものだ。

私の中国戦線最大の想い出は、河南省・中牟県城の攻防戦である。総てを結集して戦った中牟の地名を、旅立つ前に繙いていた論語の中に発見したのである。この奇跡とも思える喜びを、曲阜・霊地訪問の賜物であるとバスの中で噛み締めていた。

（中牟の地名は論語・陽貨の中の「仏肸（ビツキツ）と子路」の対談の中にある）

曲阜の闕里賓館を１９・４０に別れを告げた。西方２５㎞の兗州に向かう街道は陽

は未だ高く、泗水を渡ると興隆寺の塔が見えていた。
兗州（人口２５万）は禹王時代の六つの国の一つだと説明を受けた。夏の祖である禹王が諸侯を集め、此の地方一帯の治水を考えたのであろうか。集合して考える事を「会稽」（稽は考える）と言ったが、中国旅行は連想させる言葉が多く、楽しい想い出を残すものである。
バスから降りた兗州駅は工事中で汚く、多くの中国人乗客は駅舎外で待たされていた。特別な待合所で待機する我々に対する感情は如何と、考えわない訳にはいかない。どうしても戦中のことが脳中にあり、反省しなければならないのだ。
懐かしい往時の津浦線は、今では名を変えて「京滬線」となっていた。（滬は上海の古名）長江の架橋で上海まで直通となり、改名したのである。
夕陽が西に傾いた薄暮の２０・５０に兗州を発ち、寝台列車に揺られながら、充実した今次紀行を回顧していたのである。

6月6日

上海

兗州から８１０㎞の列車の旅は南京で黎明を迎えた。焦山・金山で名高い鎮江、太湖の無錫、呉の都であつた蘇州等に停車する度に、又一度足跡したいと旅心が募ってきた。膏肓に入つてしまつた病は、不治の域に達している。
１０・５６に新装なつた上海駅（昨年１２月完成）に到着。午後は豫園の見学となつたが、何回か入園したことのある豫園のことは割愛する。

6月7日（火）晴

上海を発つ

上海空港を飛び立つ前に龍華寺の見学となつた。郊外にある此の古寺は、７層８角の龍華塔で有名だ。一説では三国時代（２４７）に孫権（呉）によつて建てられたと伝えれている。その後、数回にわたつて修改築され、現存する塔は清代のもので高さは約４０ｍ。塔の上から黄浦江や市街が一望のもとに見渡せるという。
中央にある大雄宝殿の中に、１３８２年に鋳造した１・８トンの鐘があり、両側に３層の鐘楼・鼓楼・弥勒殿・天王殿などの堂宇が建つていた。
松田先生に塔を背景にして記念撮影をして頂き、これだけが龍華寺の唯一の印象として残つたが、御礼を申し上げたい。
１２・０５、中国民航機の鵬翼は浮力をつけて舞い上がり、２時間後の１４・１５に大阪空港に着陸、夕刻の１９時には我が家の人となつていた。

あとがき

「格物致知」という故事があるが、解釈には種々あるようだ。その一つの解釈として、格は正すという意味だから、心を正すことが格致だという説である。

即ち、心を正すことによつて、人の心の中にある先天的に備つた良知を引き出すことが、知を致す致知だという。

辞書を繙くと格心とは正しい心、格訓とは正しい教え、格言とは守るべき善い言葉と出ており、この意味において今次旅行は、格物致知の旅であつたと思う。

とるに足らない私が万水千山を越え、山西省の仏教聖地から山東省の儒教の里を訪れたことは、万言の書を読む以上に実りある旅であつた。遅蒔ながら年老いた今、「朱に近づけば赤し」の譬のように、漸く心の安住の地の雰囲気に触れ、天の彼方に飛翔する翼を得たような心地さえしたのである。

五台山の聖地は自然に尊敬の念を起させ、信仰は人生の力だと獅子吼していた。霊仙・円仁を始めとして、日本の留学僧が仏法を求めて入山し、その衆生を救う法力が我々の眼前に生きていたのである。

浄土宗の祖庭である玄中寺詣ででは、小川・前川両師から浄土宗の由来を教授され、千金の値であつた。白髪は両鬢を覆つてしまつた老令だが、衣を染めるよりも心を染めなけねばならない。そして薬罐信心、即ち長続きしない信心であつてはならない。

名峰泰山の天辺に立つて志気宏放な王者の貫禄を味わった。しかし、力山を抜き気は世を蓋うという若者の気概は、残念ながら燃えて来ない。諦観の心理は、「人生幾何ぞ」「命を知れば亦た何を憂えん」の言葉を想い出させた。これが真実である。

孔子の里・曲阜は、春秋に富んだ時からの長い夢であつた。流石に古典は不滅だということが、第一の実感である。「この世は一冊の美しい書物である。しかし、それは読まない人間にとつては、何の役にも立たない」。誠に恥じ入る言葉で「過ちを改めざるを過ちという」教えが、私に耳の穴を開いて聴けと、聞こえるようであつた。

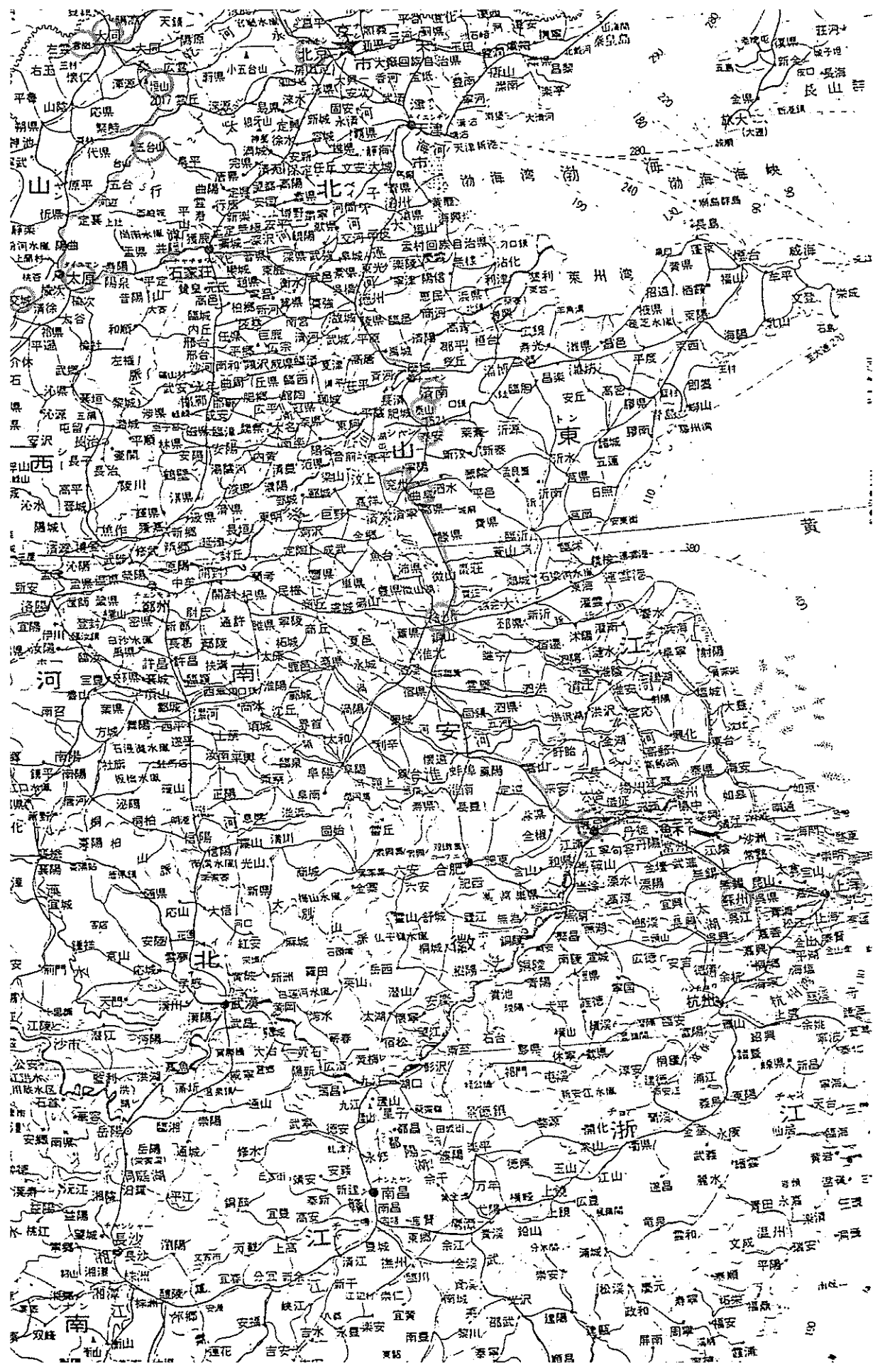
欽慕の念を抱いていた各地の訪問は、人間を重くさせた感じを与え、坦々として心の健康に役立つたものと心喜している。

時代や国境を超えて生きている言葉は、その言葉の背後に生きた人がおり、生きた歴史が存在するのだ。燃やすのには古い薪がよく、飲むのには古い酒、信頼するのには古い友がよい。そして読むものには古い書物が良いのではないだろうか。

私が此の紀行文を書いている時も、刻々と時が失われている。時計の針の刻む音が「喪失、喪失、喪失」と聞えている。これからは単なる生存であつてはならない。私なりに時間を有効に利用する時だけが、生活だと思わなければならない。

荘子が言つた、尻尾を泥の中に引きずるという「尾を塗中に曳かん」即ち、これからは境遇が如何であろうが、自分の心に適した生活を送り、人生を楽しんで行きたいのである。

昭和６３年６月　　寺前信次


北京
天津
大同
太原
石家莊
濟南
青島
烟台
威海
渤海湾
渤海
黄海
遼東半島
長山諸島
大連
旅順
長島
黄河
東平湖
洪澤湖
太湖
鄱陽湖
洞庭湖
南京
合肥
武漢
杭州
上海
南昌
長沙
福州
廣州
鄭州
開封
徐州
蚌埠
安慶
九江
宜昌
重慶
成都
西安
太原
張家口
石家莊
保定
天津
濟南
青島
烟台
威海
連雲港
南京
蘇州
上海
杭州
寧波
温州
福州
厦門
廣州
汕頭
海口
南寧
昆明
貴陽
長沙
南昌
武漢
合肥
鄭州
西安
太原
呼和浩特
銀川
蘭州
西寧
拉薩
烏魯木齊
哈爾濱
長春
瀋陽
大連
旅順
長島
遼東半島
長山諸島
渤海湾
渤海
黄海